

扇が丘ゴショ遺跡

2019

石川県野々市市教育委員会

扇が丘ゴショ遺跡

2019

石川県野々市市教育委員会



調査区遠景航空写真（南から）



調査区全景垂直写真（見開き右が北側）

例　　言

- 1 本書は、学校法人 金沢工業大学 47号館の建設に先立って、野々市市教育委員会が実施した扇が丘ゴショ遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は、石川県野々市市扇が丘・高橋町地内であり、今回の調査対象地は高橋町 148 番地内である。
- 3 扇が丘ゴショ遺跡は、伏見川中小河川改良工事（高橋川）に先立ち、平成元年～平成 4 年（1989～1992 年）にかけて石川県立埋蔵文化財センターによって埋蔵文化財発掘調査が行われており、その報告については、1998『扇が丘ゴショ遺跡』で報告されている。なお、今次調査は第 4 次調査にあたる。

過去の調査次数、期間、面積、調査機関は以下のとおりである。

第1次調査	平成元年 10月 16日～同年 12月 16日	約 1,100m ²	調査機関：石川県立埋蔵文化財センター
第2次調査	平成 2年 4月 23日～同年 7月 9日	約 2,000m ²	調査機関：石川県立埋蔵文化財センター
第3次調査	平成 4年 5月 11日～同年 5月 28日	約 150m ²	調査機関：石川県立埋蔵文化財センター

- 4 調査原因は、学校法人 金沢工業大学 47号館の建設である。
- 5 調査は、学校法人 金沢工業大学から依頼を受けて野々市市教育委員会が実施した。
- 6 調査にかかる費用は、学校法人 金沢工業大学が負担した。
- 7 今次調査の期間・面積・担当者は以下のとおりである。

・現地調査期間	平成 29年 8月 1日～平成 29年 9月 27日
・整理業務期間	平成 30年 4月 1日～平成 31年 3月 29日
・現地調査面積	1,016m ²
・調査担当者	西村 慶子（野々市市教育委員会文化課 主事）
・報告書執筆・編集	西村 慶子
・出土品写真撮影・報告書執筆補助	花田 和希（野々市市教育委員会臨時職員）

- 8 本書についての凡例は以下のとおりである。
 - (1)方位は座標北を指し、座標は国土交通省告示の平面直角座標第Ⅶ系に準拠している。
 - (2)水平基準は海拔高であり、T.P.（東京湾平均海面標高）による。
 - (3)出土遺物番号は、本文・観察表・挿図・写真に対応する。
 - (4)挿図の縮尺は土器・石器については S = 1/3、金属品については S = 1/2 である。
 - (5)写真図版の遺物の縮尺は基本的に S ≈ 1/3 であるが、中世の遺物については縮尺の統一はしていない。
 - (6)土層図・遺物観察表の色彩注記は、『新版標準土色帖』に掲った。
 - (7)遺構名称の略号は以下のとおりである。

溝：SD　　土坑：SK　　小穴：SP　　炉：SL　　竪穴建物：SI　　掘立柱建物：SB

- 9 調査に関する記録と出土遺物は、野々市市教育委員会が一括して保管・管理している。

目 次

巻頭カラー写真図版

例言

第1章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と環境.....	1頁
第2節 野々市市の歴史的環境.....	1頁

第2章 調査の経緯と経過

調査の経緯と経過.....	5頁
---------------	----

第3章 調査区の設定と基本層序

第1節 調査区の設定.....	6頁
第2節 調査区の基本層序.....	6頁
調査区土層断面.....	7頁
調査区平面.....	9頁

第4章 調査の成果

第1節 弥生時代以前.....	12頁
第1項 遺構.....	12頁
第2項 遺物.....	16頁
第2節 古代.....	23頁
第1項 遺構.....	23頁
第2項 遺物.....	29頁
第3節 中世.....	31頁
第1項 遺構.....	31頁
第2項 遺物.....	33頁

第5章 総括

第1節 調査成果の総括.....	35頁
第2節 まとめ.....	36頁

遺物観察表.....	37頁
写真図版.....	43頁
抄録.....	58頁

第1章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と環境

野々市市は石川県のはば中央、石川平野に位置する（第1図）。市の大きさは南北約6.7km、東西約4.5kmで、県内で最も面積の小さい自治体である。市域は白山を源とする県下第一級河川手取川によって形成された手取川扇状地の北東扇央部から扇端部に位置しており、市内の標高は、最も高い地点で標高約50m、最も低い地点で標高約10mで、市の大部分は扇央部にあたり、緩やかな斜面となる地勢を有している。扇が丘ゴショ遺跡は市域中央東端に位置している。遺跡の東には富樫丘陵が南北に走っており、この丘陵の稜線間にこうように多くの小河川が流れている。遺跡の東隣を流れる高橋川もその小河川のひとつであり、この高橋川が運んできた土砂の堆積が周辺一帯の地形の形成に大きく関わっていると考えられる。高橋川は野々市市北端の押野で伏見川に合流し、金沢市内を流れる犀川に合流する。

一帯は手取川扇状地の扇端部であるとともに、伏見川扇状地も広がっており、両扇状地の複合地帯となっている。当遺跡は手取川扇状地の尾根状微高地に立地しており、標高は18.0m前後である。



第1図 野々市市位置図

第2節 野々市市の歴史的環境

縄文時代

手取川扇状地扇端部にあたる野々市市北部は、扇状地の地下を流れる豊かな伏流水に恵まれた地域であり、多くの遺跡が集中する。特に、後期・晩期には多くの集落が形成され、国指定史跡御経塚遺跡（3）のほか国指定史跡チカモリ遺跡（金沢市）、出土品が重要文化財に指定されている中屋サワ遺跡（金沢市）といった著名な遺跡を筆頭に数多くの縄文集落遺跡が分布している。対して、扇央部にあたる野々市市南部は、各遺跡から縄文土器片が散見される程度であり明確な縄文遺跡はない。しかし、栗田遺跡（53）では、石器の母岩と剥片が集中する石蹠原が見つかっており、石器製作等の生産活動域であったことが判明している。

弥生時代

野々市市は、弥生時代前・中期の集落遺跡は少なく、弥生時代後期の集落遺跡は数多く分布している。

扇状地扇端部にあたる野々市市北部の後期集落遺跡は、御経塚シンデン遺跡（1）、御経塚オツ遺跡（4）、三日市A遺跡（13）を中心としたその周辺遺跡、押野タチナカ遺跡（25）、押野ウマワタリ遺跡（26）、徳丸ジョウヤダ遺跡（46）などが挙げられる。これら遺跡からは、緑色凝灰岩・鉄石英などの管玉石材や管玉未製品、砥石や蟹、鉄錐などの製作道具類が出土しており、弥生時代後期の北陸における玉作りの隆盛を出土品からうかがうことができる。扇状地扇央部～扇端部にあたる野々市市中央部の後期集落遺跡は、高橋セボネ遺跡（32）、当遺跡（35）が挙げられる。両遺跡は隣接しており、同時期の遺構・遺物を多数検出していることから、同一集落であることは明らかである。両遺跡のうち、高橋セボネ遺跡では床面を拡張した堅穴建物や焼失住居、掘立柱建物が複数認められたことから、高橋セボネ遺跡が集落の中心部であり、扇が丘ゴショ遺跡は集落の南側縁辺地であると考えられる。扇状地扇央部にあたる野々市市南部は、近年の調査によって後期集落遺跡の存在が判明した地域であり、上新庄チャンバチ遺跡（77）、熱野遺跡（白山市）が挙げられる。これらの遺跡は近接して営まれていることから、同一集落である可能性が考えられる。富樫丘陵の西縁辺に後期弥生集落が点在していたことは近年の発

掘調査の一成果として大きいといえる。

後期後半における小・中規模集落の顕在化と立地の変化は、生活を維持するための生産力が向上したことによる人口の増加に起因すると考えられ、このことは、鉄刃を装着する農耕具の普及による農耕関連技術の進歩と切り離して考えることはできない。北陸における玉作りの活況は先に述べたが、それと並行して多数の鉄器や鍛冶技術がもたらされており、北陸における玉作りが衰退する後期末頃においても石川県内での玉作りが継続されていることは、県内の後期集落遺跡の広がりを考える上で重要である。

古墳時代

野々市市は、古墳時代の遺跡は少なく、集落遺跡は前期、墳墓は前期と末期のみである。

扇状地扇端部にあたる野々市市北部は、弥生時代後期集落から連なる古墳時代前期集落の御経塚シンデン遺跡(1)と二日市イシバチ遺跡(11)が挙げられる。御経塚シンデン遺跡内には、前方後方墳と方墳で構成された御経塚シンデン古墳群が築かれている。扇状地扇央部にあたる野々市市南部は、前期の集落遺跡はなく、先に挙げた上新庄チャバチ遺跡(77)から前期の前方後方墳1基と方墳1基が認められたのみである。おそらくは未発見の前期集落が近隣にあると考えられ、今後の調査課題といえよう。この後は遺跡の空白期が続き、次に遺跡が現れるのは古墳時代後期末である。市内南部唯一の横穴式石室である上林古墳(73)のほか、末松大兄八幡神社境内の方墳である末松古墳(62)や、末松遺跡(64)から周溝と考えられる溝跡が数基認められるなど、狭い範囲に小墳墓が点在していたと考えられる。

古代

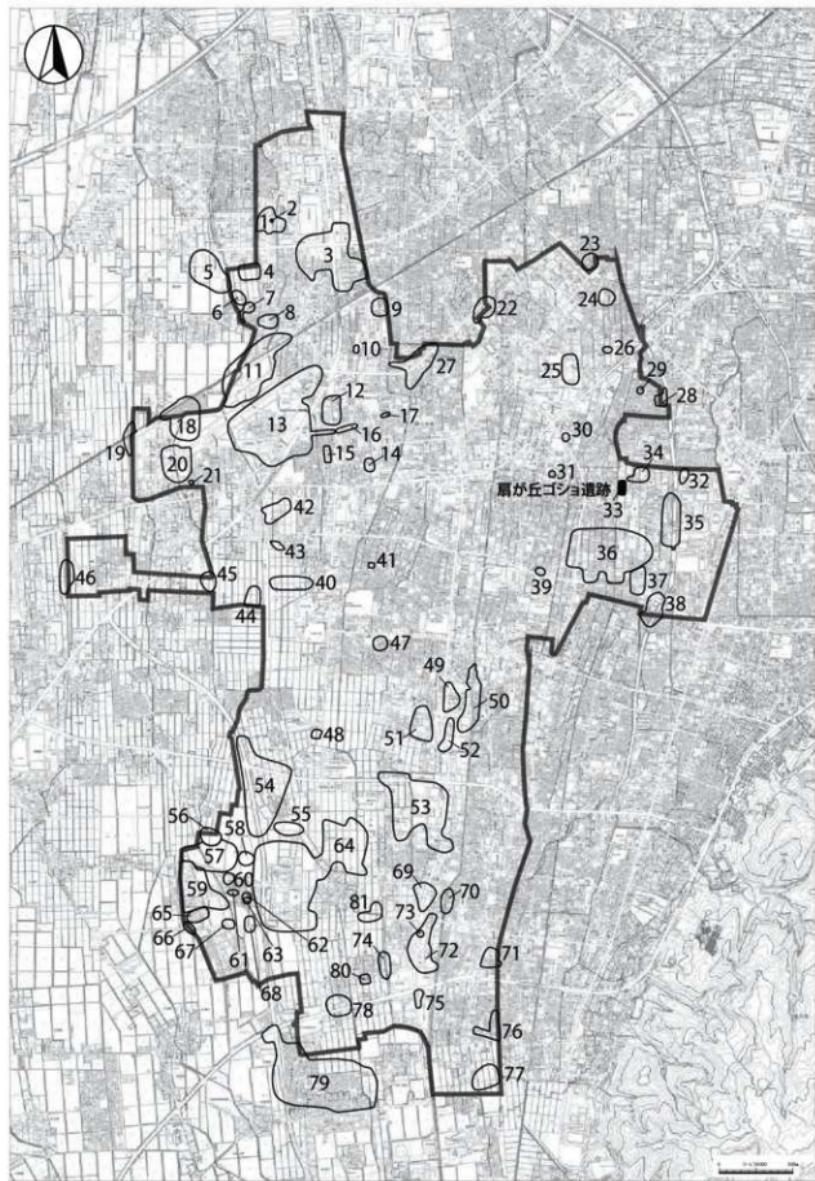
扇状地扇端部には、国指定史跡東大寺領横江莊遺跡・莊家跡上荒屋遺跡(白山市・金沢市)といった初期莊園遺跡とともに、古代北陸道が確認された三日市A遺跡(13)がある。同遺跡からは道路方向を意識した8世紀の大型掘立柱建物などが認められており、官道を中心とした集落の広がりを考えることができる。扇状地扇央部には、国指定史跡末松庵寺跡(59)がある。末松庵寺は7世紀後半に建立された北陸最古級の古代寺院で、法起寺式の伽藍配置を有していたことが判明している。寺の周辺には同時期に集落が形成され、これら集落遺跡は末松遺跡群(56~68)とよばれており、その盛衰を末松庵寺と共にしている。また、末松庵寺の東方には7世紀前半から集落が形成され、上林・新庄遺跡群(69~78)とよばれており、7世紀後半から8世紀初頭の区画溝や大型掘立柱建物群が認められている。末松庵寺の建立をはじめ、扇央部一帯の急速な開発が進められた時期である。

中世以降

11世紀後半~12世紀ごろ、扇状地開発に伴って林氏や富樫氏などの在地領主武士団が興った。林氏は野々市市南部一帯を基盤とし、林郷(現在の野々市市南部とその周辺)を支配したとされるが、13世紀前半には衰退した。これに代わり台頭したのが富樫氏であり、建武2年(1335)には加賀守護職に任せられ、住吉町や扇が丘に設けた富樫館(36)を守護所とし、大規模な堀などを築いて加賀国の中心地とした。市内には、富樫氏底流の押野館跡(25)や富樫氏配下と伝わる山川館跡(33)などが散見されている。徳用クヤダ遺跡(20)では、計画的な宅地割や道路遺構、大溝で囲まれた居館跡が確認されており、在地領主層の館跡とその周辺の様相がわかる。

集落は、14世紀頃までは散村的様相を呈していたと考えられる。しかし15世紀頃になると集落の形態は変化し、集落の規模は大きくなって集村的様相を呈するようになる。この集落は、現在の市内旧村の原形であり、今も居住域単位として機能している場所が多くある。

近世の野々市は、農村が点在する金沢城下の近郊地で、北国街道の宿場町のひとつであった。金沢城下から京都方面へ向かう北国街道沿いには駅馬などが整えられた「野々市宿」が置かれ、交通の要所として栄えた。



第2図 野々市市遺跡分布図 (S=1/10000)

表1 野々市市遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	種別	時代	
1	御経坂シンジケ道跡 御経坂シンジケ古墳群	御経塚	集落 古墳	國文 弥生 古墳 中世	
2	御経坂塚	御経塚	集落	國文 弥生 古墳 古代 中世 近世	
3	御経坂道跡	御経塚	集落	國文 弥生 中世	
4	御経坂オツコ道跡	御経塚 長池	集落	國文 弥生 古墳 古代	
5	横江大屋敷	長池	散布地 集落 古墳	國文 弥生 古墳 古代	
6	長池ホタチジ道跡	長池	集落	國文 弥生 古墳	
7	長池ホシタコボ道跡	長池	集落	國文 弥生 古墳 中世 近世	
8	長池ホシタコボ道跡	長池	集落	國文 弥生 古墳 中世 近世	
9	野代道跡	野代	散布地	國文	
10	野代ホバナケシキ道跡	野代 二日町	散布地		
11	一日町イシバタ道跡	一日町	集落	その他の墓	國文 弥生 古墳 古代 中世 近世
12	一日町ヒガシカシガ道跡	一日町 堀前	集落	弥生 古代 中世	
13	一日町ハ道跡	一日町 二日町	集落	その他の墓	國文 弥生 古代 中世 近世
14	堀前ホタベニエ道跡	堀前	散布地		
15	堀前マ	堀前	散布地		
16	堀前ホチタン道跡	堀前	集落	古代	
17	堀前ホラドマリ道跡	堀前	集落	古代	
18	鶴ヶ谷道跡	鶴町 佐用町	集落	弥生 古代 中世 近世	
19	香谷ホ津田道跡	鶴町	集落	國文 古代	
20	能用ホヤダ道跡	能用町	集落	國文 弥生 古代 中世	
21	能用ホヤケ道跡	能用町	集落		
22	上吉ノ道跡	御野	社寺	中世	
23	御野ホ塚古墳	御野	古墳	古墳	
24	御野ホ塚道跡	御野	集落	國文	
25	御野ホチナカ道跡	御野	集落 城館	國文 弥生 中世	
26	御野ホマワタ道跡	御野	集落	弥生	
27	御越ホカウカイサザイ道跡	御越	集落	弥生	
28	横川ホ利道跡	本町	集落	弥生 古墳 中世	
29	本町ホヨウダ道跡	本町	集落		
30	本町ホバナケシキ道跡	横町	散布地		
31	本町ホラグダ道跡	本町	散布地		
32	高橋セホホト道跡	高橋町	散布地 集落	國文 弥生 古墳	
33	山川道跡	高橋町 本町	散布地	國文 中世	
34	高橋ホガガタ道跡	高橋町	集落	弥生	
35	福井ホゴシヨリ道跡	福井町 高橋	散布地 集落	弥生 古代 中世	
36	笠懸道跡	住吉町 畠が丘	散布地 城館	國文 古代 中世 近世	
37	福が丘セガグダ道跡	福が丘	散布地 集落	國文 古代 中世	
38	福が丘ハワワゴク道跡	福が丘	散布地 集落	國文 弥生 古代 中世	
39	菅原ホツツヤケ道跡	菅原町	集落	中世 近世	
40	瀬内道跡	瀬内	散布地	國文 中世 近世	
41	太平ホイドマカ道跡	太平寺	集落	古代	
42	田尻ホツタ道跡	田町	集落	弥生	
43	田尻ホアカ道跡	田町	集落	弥生	
44	通花ホアカグダ道跡	通花寺町	集落	古代	
45	田中ホダ道跡	通花寺町 那町	集落	弥生 古墳	
46	龍丸ホヨウジヤダ道跡	梅町	集落	弥生 古墳 古代 中世	
47	三林道跡	下林	駅跡	中世	
48	下林ホバシヨウアケ道跡	下林	集落	古代 中世	
49	下納ホヘイダシヨリ道跡	下納	集落	國文 古代 中世	
50	下納ホチナカ道跡	下納 矢作 菊田	集落	國文 古代 中世	
51	垂平ホナカシエンジ道跡	垂平田	集落	弥生 古代 中世	
52	二納ニシヨリ道跡	二納 菊田	集落	國文 弥生 中世 近世	
53	垂田道跡	垂田 垂平 中林	集落	國文 古代 中世 近世	
54	清今ガトウ道跡	清今 末松	散布地 集落	國文 弥生 古墳 古代 中世	
55	末松ホ酒田道跡	清今	集落	古代 中世	
56	末松正寺道跡 柏止道跡	末松	集落 社寺	古墳 中世	
57	末松ホイカン道跡	末松	集落	國文 弥生 古墳 古代 中世	
58	末松ホ道跡	末松	集落	古代	
59	末松寺寺跡	末松	散布地 集落 社寺	國文 弥生 古墳 古代 中世 近世	
60	古元ホ船跡	末松	城館		
61	末松ホ道跡	末松	散布地	古代	
62	末松ホ古墳	末松	古墳	古墳	
63	末松道跡	末松	城館	中世	
64	末松道跡	末松 清金 中林	散布地 集落 その他の墓	國文 弥生 古墳 古代 中世	
65	大船ホ船跡	末松 清金	散布地	古代 中世	
66	末松ホ道跡	末松	散布地		
67	法船ホ船跡	末松	城館		
68	末松ホりわん道跡	末松	社寺	中世	
69	下野ホアラク道跡	新庄 中林 上林	集落	古代 近世	
70	下野ホタナカタ道跡	新庄	集落	古代	
71	下野ホフルナツヅリ道跡	新庄	散布地 集落	弥生 古代	
72	上林ホ庄道跡	上林 新庄	集落	古墳 古代	
73	上林ホ古墳	新庄	古墳	古墳	
74	上林ホラグダ道跡	上林	集落	古代	
75	上新ホニシカグダ道跡	新庄 上林	集落	弥生 古墳	
76	新庄ホキノギキ道跡	新庄	集落	古墳 中世	
77	上新ホチャシバチ道跡	新庄	集落	弥生	
78	上林道跡	上林	集落	弥生 古代	
79	安美寺道跡	上林	集落	弥生 古代	
80	上林ホイグナ道跡	上林	集落		
81	上林ホシガキ道跡	上林	集落	古代	

第2章 調査の経緯と経過

今次の扇が丘ゴシヨ遺跡発掘調査業務は、高橋町148番地内における金沢工業大学47号館の建設が調査原因である。平成29年4月27日付で、金沢工業大学代理人から野々市市教育委員会に高橋町148番地内での金沢工業大学47号館建設の打診があった(以下、47号館とする)。建設予定地は打診の時点で既に更地となっていたが、以前は大型建造物が建っており、その建造物が建てられた時点では当該地は埋蔵文化財包蔵地と判明していなかった。その後、周辺地域の開発工事に伴う発掘調査によって高橋町148番地内にも埋蔵文化財包蔵地が広がることが判明し、扇が丘ゴシヨ遺跡の一部として扱うに至った経緯がある。

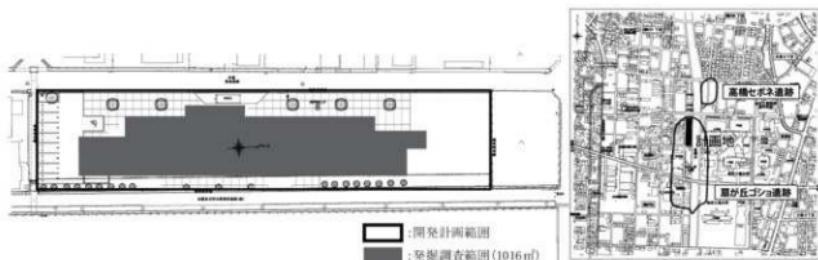
大型建造物による遺跡の破壊状況と具体的な遺跡の広がりを把握するため、金沢工業大学より依頼を受け、平成29年5月26日に試掘調査を行った。結果、建造物の基礎柱部にあたる部分の遺構は破壊を受けていたものの、それ以外の部分では土坑や溝などの遺構が残存することを確認した。これに伴い遺跡の分布範囲を詳細に把握するため試掘調査範囲を拡大したところ、建設予定地の全域が遺跡であり、良好な状態で残存していることが判明した。よって市教委は、埋蔵文化財包蔵地の範囲を広げて保護措置を図ることとし、平成29年6月7日付石川県教文第695号において周知の埋蔵文化財包蔵地として扇が丘ゴシヨ遺跡の範囲が認められた。

47号館建設については、掘削工事を伴わない箇所を除いて発掘調査が必要となったことから、石川県教育委員会に対し、平成29年6月13日に文化財保護法93条に基づく土木工事等のための発掘届を進呈し、同日付で石川県教育委員会より通知がなされた。

平成29年6月19日に金沢工業大学より埋蔵文化財発掘調査依頼を受け、平成29年6月20日に依頼の受諾を回答し、平成29年6月26日に金沢工業大学と野々市市教育委員会の間で協定を締結した。なお、出土遺物の整理作業業務等は平成29年度中に行うことは困難であることから、平成29年度に現地発掘調査業務を完了させ、翌年の平成30年度に出土遺物の整理作業及び発掘調査報告書刊行業務を完了させることを協定書内で結んだ。

現地発掘調査業務については、8月1日より開始し、大型重機での掘削後、人力による遺構掘削作業と遺構詳細記録作業を行い、9月22日にラジコンヘリによる空中写真測量を経て9月29日に調査を終了した。

出土遺物の整理作業及び発掘調査報告書刊行業務については、平成30年4月2日から出土遺物の洗浄を開始し、遺物への注記、遺物の接合及び実測作業、遺物写真撮影、報告書作成を経て、平成30年3月29日に発掘調査報告書を刊行した。



第3図 発掘調査位置と範囲図

第3章 調査区の設定と基本層序

第1節 調査区の設定

今回の調査地には以前に大型建造物が建っており、それを撤去してからの調査となった。そのため、調査区中央と調査区東側には大型建造物基礎柱による遺構面の破壊が著しく見られる。基礎柱はコンクリート製であり、また遺構面を深く破壊していることが事前の試掘結果によって判明していたことから、基礎柱による破壊部分については掘り下げずに遺構面と同標高で検出するに止め、搅乱として扱った。

今回の調査対象区は47号館の建物建設によって破壊される範囲のみを調査対象とし、現地表面を改良するだけに止まる駐車場等の範囲は調査対象から外した。また、発掘調査の時点で現代盛土及び大型建造物基礎柱による搅乱によって地盤が脆弱となっている部分が一部あり、その部分についても安全性を考慮して調査対象から外した。

第2節 調査区の基本層序

基本層序については、下に記した土層断面柱状模式図によって説明する。なお、模式図の基となる層位については調査区西壁から抽出しており、柱状図ポイントA～Fについては、西壁土層断面図に記している。

第1層は現代盛土と現代搅乱である。盛土は大型建造物が建てられた際に造成されたものであり、固くしまってはいるが混入物が目立つ。現代搅乱は大型建造物を撤去する際に発生したものである。

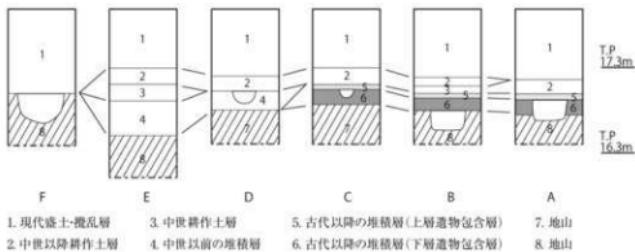
第2層は中世以降の耕作土および床土である。遺物の混入が認められないことから詳細な年代は不明である。

第3層は中世耕作土である。当該層からの出土遺物は認められなかつたが、中世の遺構が当該層を切っていること、また野々市市内の発掘調査において多く確認できる耕作土と同質であったことからこのように判断した。

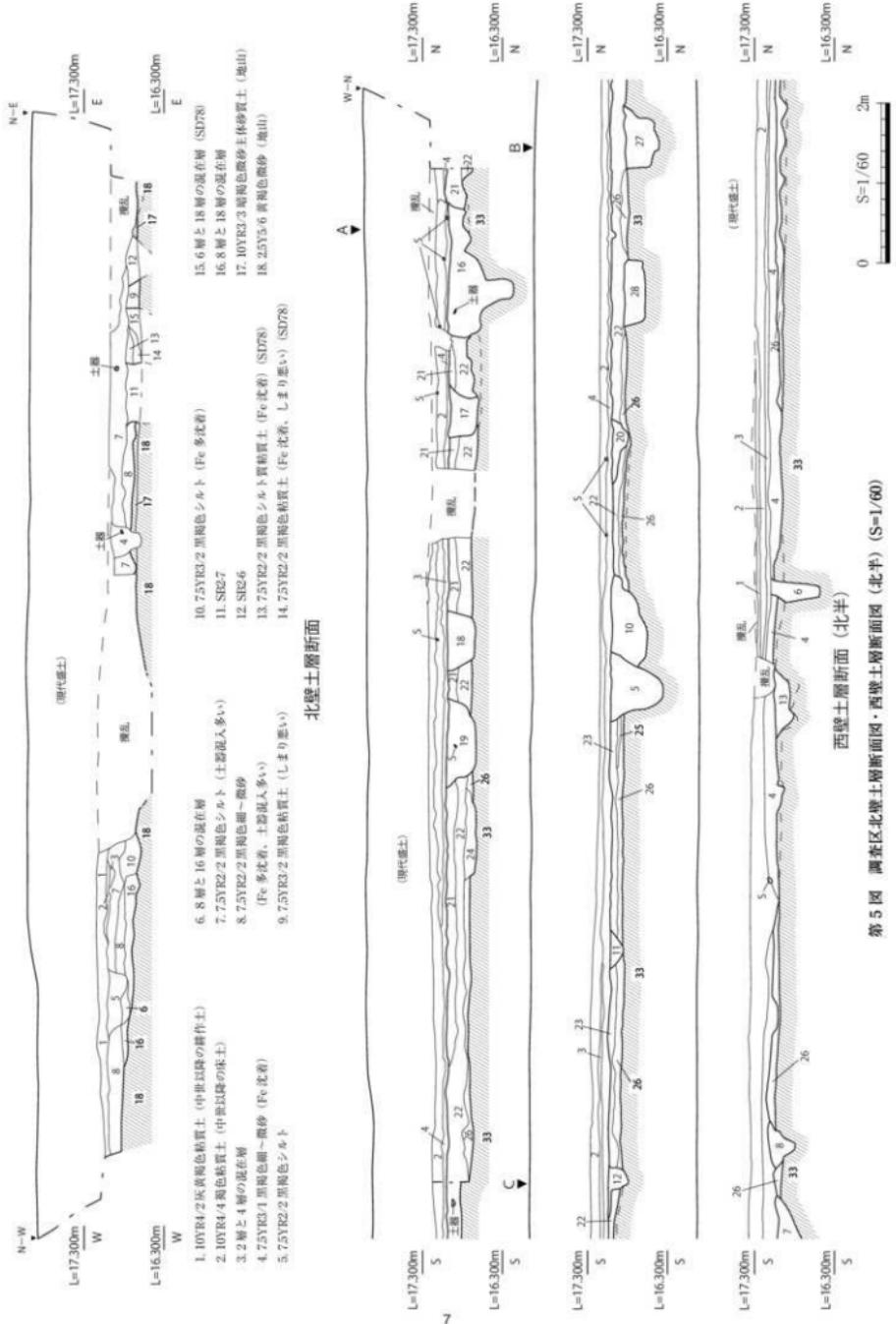
第4層は中世以前の自然堆積層である。凹地であった場所にゆるやかな堆積によって形成されたと考えられる。

第5層・第6層は古代以降の遺物包含層である。土質・土色ともにはば同じ黒色シルト層であり、有機物の腐植堆積層であることがわかる。ただし、第5層は遺物の混入が非常に多く、地山ブロックの混入が少ない。一方、第6層は遺物の混入が少なく、地山ブロックの混入が目立つ。これらのことから、土質は非常に類似するものの、2層の間には一定の時期差もしくは人為的な搅拌があると考えられる。

第7層・第8層は地山である。地山は基本的には黄褐色の砂質で、水はけは良好である。ただし、ポイントD・E付近のみが周囲に比べて凹んだ地形となっており、凹みに堆積した粘土質の地山部分だけは水はけが悪い集水場となり、一部はグライ化している。よって、凹みに堆積している粘土質の地山を第7層、当該地の本来の地形を形成している砂質の地山を第8層とした。

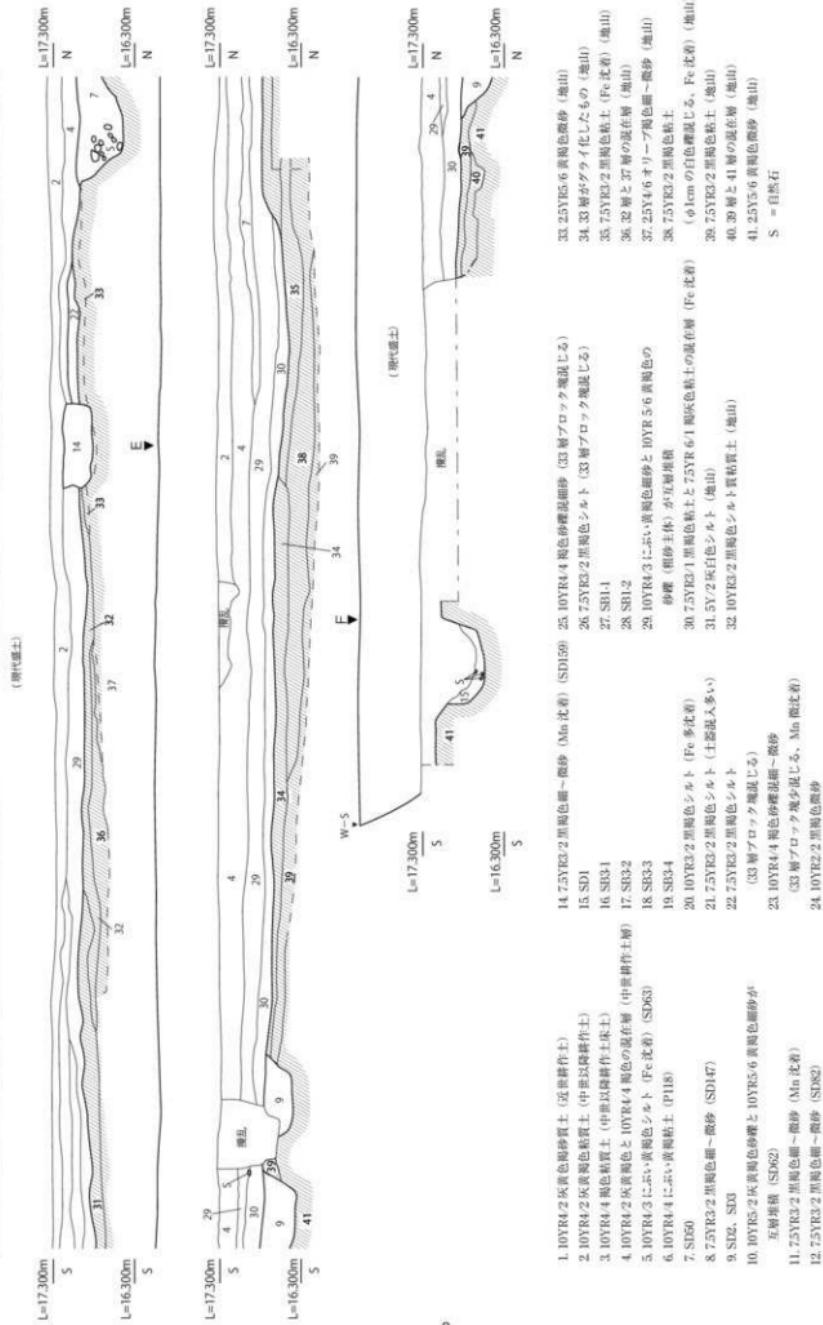


第4図 基本層序



第5圖 調查區北壁土層斷面圖・西壁土層斷面圖（北半）(S=1/60)

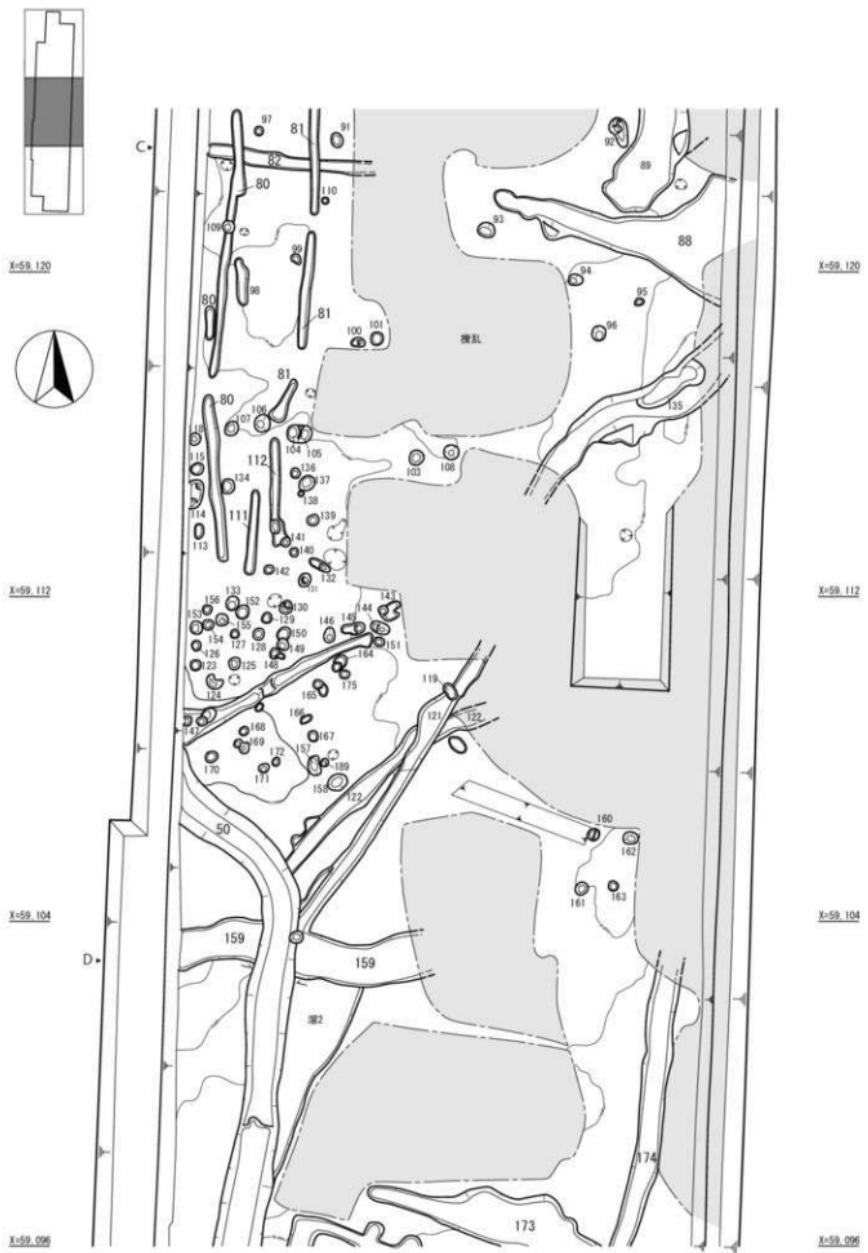
D



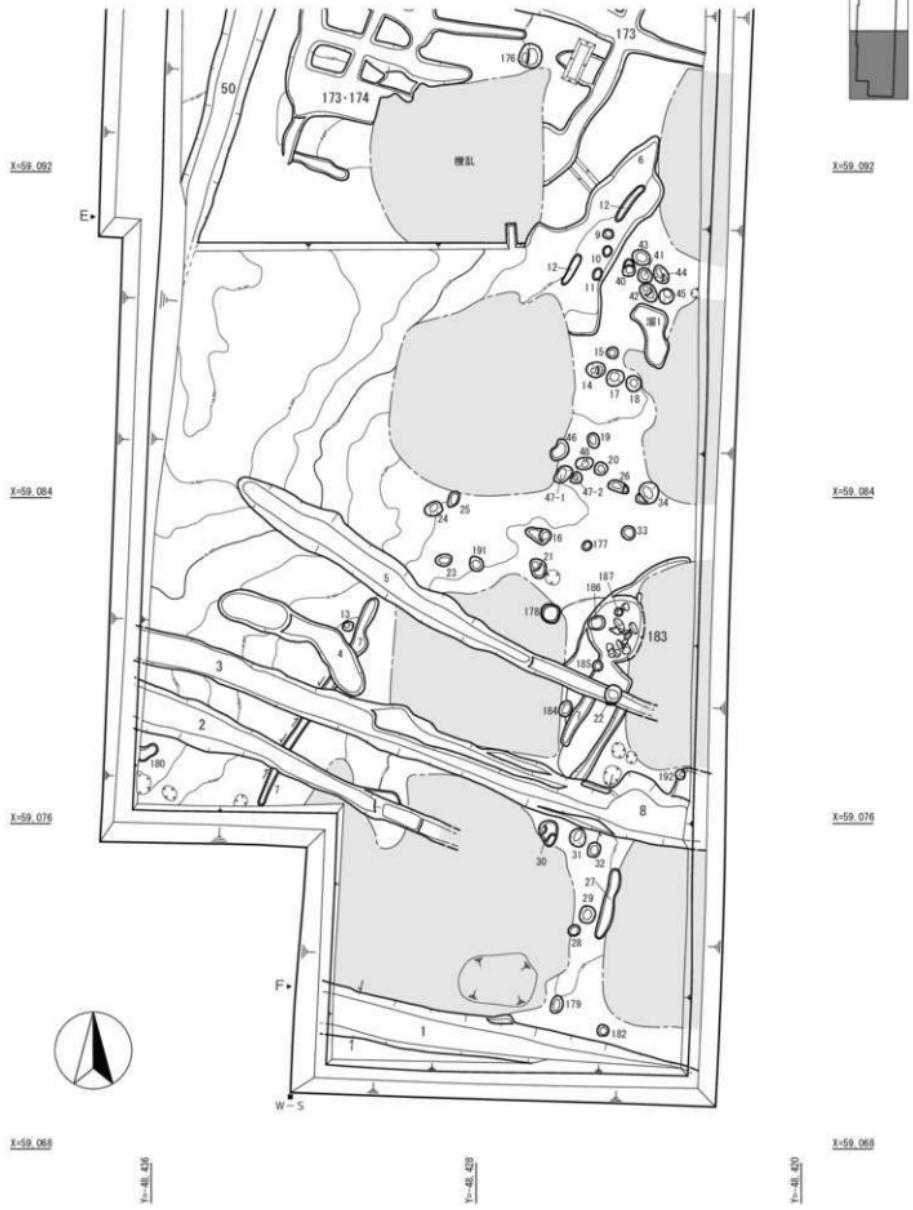
第6図 潟谷区西壁土層断面図(南半) (S=1/60)



第7図 調査区平面図 (S=1/120)



第8図 調査区平面図 (S=1/120)



第9図 調査区平面図 (S=1/120)

第4章 調査の成果

第1節 弥生時代以前

第1項 遺構

縄文時代の遺構はない。弥生時代の遺構については、明確に判断できるものは竪穴建物のみである。

SI1 (第10図)

調査区の北側中央で検出した小型の竪穴建物である。建物の形状は不整形な円形で、主軸は北東を向いている。建物規模は南北約2.7m、東西2.9m、床面積約6.15m²、床面標高16.55m前後である。深さは最も遺存状態が良好な場所で遺構検出面から約15cm下に床面を検出した。貼床、壁溝はともに認められなかった。

柱穴は直径約30cm程度のピット2基を検出したが、深さは床面からそれぞれ5cm前後と浅く、埋土も床面と明らかに異なるものではなかった。現代の大型建造物によって大きく破壊を受けているため残存状態は悪いが、出土遺物も極少ないことからSI3に付属する倉庫等の小規模な建物で、柱なども簡易なつくりであった可能性を考えられる。

SI2

遺構検出時に付番したが、結果として遺構ではなかったことから欠番とした。

SI3 (第11～14図)

調査区の北側東よりで検出した大型の竪穴建物で、焼失住居であると考えられる。竪穴の形状は隅丸長方形で、主軸は北東を向いている。建物規模は長辺7.1m、短辺5.2m、床面積約37m²、床面標高16.45m前後である。深さは最も遺存状態が良好な場所で遺構検出面から約30cm下に床面を検出した。貼床、壁溝はともに良好な状態で認められた。床面直上からは多量の土器と炭化材が出土している。

貼床は厚さ約4cm程度で、床面全体に広がっていることが認められた。壁溝は建物をほぼ完周しており、残存状況は箇所によって異なるが、最大幅は約50cm、最小幅は約20cm、深さは最も遺存状態が良好な箇所で床面から約15cm程度掘り下げたレベルであることを確認した。

柱穴は6基検出した。建物を拡張した痕跡が認められないことから、当初から多角形の柱配置であったと考えられる。柱穴の形状は全て円形であるが、床面直上で柱穴を検出できたのはSP4・5のみであり、他の柱穴は貼床を取り除いて地山面を削り出した状態で検出した。SP1は直径約45cm、深さ約10cm、SP2は直径約28cm、深さ約20cm、SP3は直径約24cm、深さ約25cm、SP4は直径40cm、深さ30cm、SP5は直径18cm、深さ22cm、SP6は直径約20cm、深さ約10cmである。なお、SP4・5以外は地山面で検出した幅と深さである。

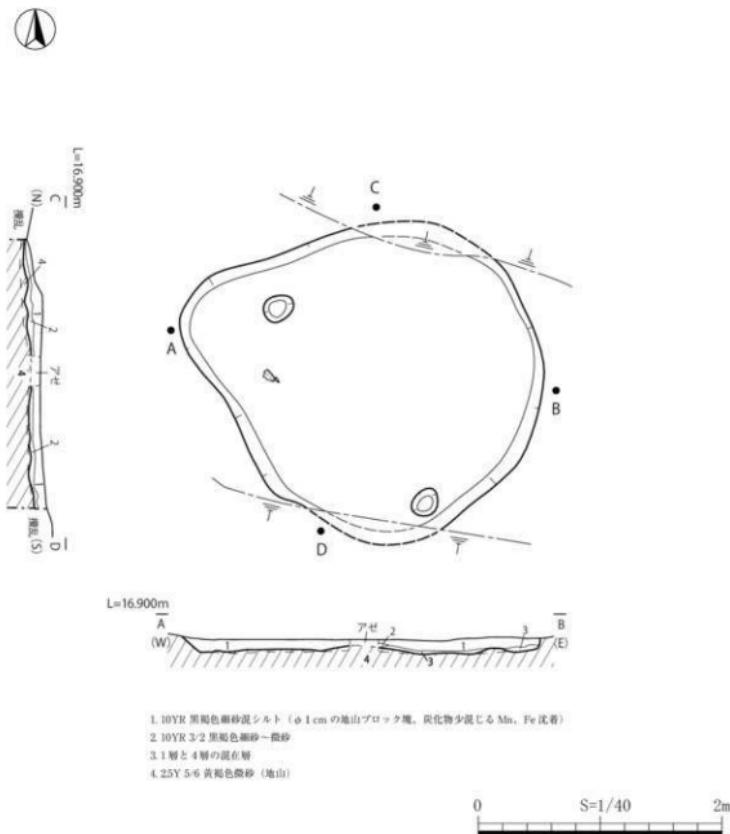
建物中央で煙跡と考えられる遺構SL1を1基検出した。SL1は直径57cm、深さ27cmの円形で、埋土には多量の炭化物小塊と少量の焼土小塊が含まれていた。SL1自体に被熱した痕跡は認められなかった。

建物中央および建物壁際から大型土坑を2基検出した。この土坑は北接する高橋セボネ遺跡において「特殊ピット・土坑」と呼ばれていたものである。建物中央の不定形な土坑をSK1、長辺沿い中央の方形土坑をSK2とした。SK1は長軸長約2.4m、幅約50～80cm、深さ約15～25cmの不定形土坑で、貼床の上から掘りこまれている。遺物は遺構埋土から出土する土器の小片のみであり、良好な状態の遺物は床面とほぼ同じレベルであるSK1検出面直上で確認したものである。SK2は長辺1.2m、短辺1.0m、深さ約40cmの方形土坑で、貼床の上から掘りこまれている。遺物はSK1と同じくSK2の埋土中からではなく、床面とほぼ同じレベルであるSK2検出面直上で確認したものである。これら2基の埋土からは顕著な炭化物や遺物が認められないことから、SI3を廃棄する際、事前に埋め戻した可能性が考えられる。

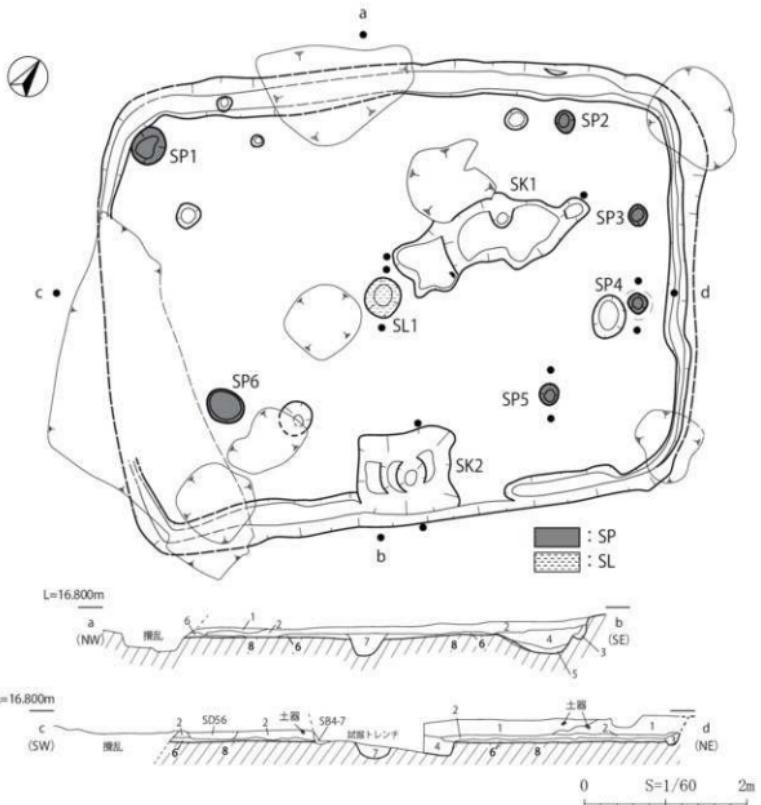
床面直上で検出した炭化材は、良好な状態のものは長さ約50cm、直径約10cmと木柱の形状を留めていた。第13図で示したとおり、建物の北隅が最も遺存状態が良い。南隅と東隅でも長短は異なるが木柱の形状で認められた。また、図上で示すことはできなかったが、建物西側でも炭化物の薄く面的な広がりが認められた。炭化材は、建物中央から建物隅または壁に向かって放射状に広がっており、推測ではあるが、これらは建物の柱材ではなく垂木などの屋根材であった可能性が考えられる。

遺物についての詳細は次項に述べるが、床面直上から、壺、甕、高杯、鉢、塊、器台、石製品などが出土した。第13図で示すとおり、遺物は一ヶ所に集中していたのではなく建物床面全面から出土している。なお、遺物は、古代や中世の遺構によって搅拌を受けた状態であることから、建物埋土中ではあるが床面直上でないものは図化せずにグリッド①～④に分けて取り上げている。床面直上の遺物は原位置からほぼ動いていないものと考えられる。

建物は弥生時代後期後半のものであるが、末期にごく近い時期のものであると考えられる。



第10図 SII 平面図・断面図 (S=1/40)

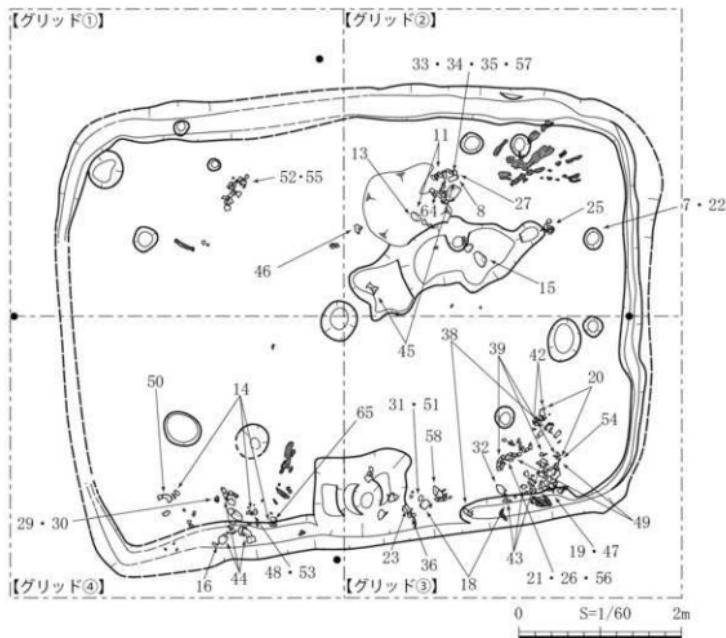


1. 25YR 2/1 黒色細～微砂 (Fe沈着、炭化物少混じる)
 2. 10YR 3/2 黒褐色細～微砂 (Fe沈着、炭化物混じる)
 3. 5YR 3/2 オリーブ黒色細～微砂 (土中に炭化物多混じる) (膠済)
 4. 10YR 4/3 に近い黄褐色中～細砂 (Fe沈着、炭化物少混じる) (SK1・2)
 5. 10YR 4/3 に近い黄褐色細砂 (SK2)
6. 25YR 6/6 明黃褐色微砂と 25YR 9/2 委灰黃褐色微砂の混在層 (鉢底)
 7. 7.5YR 3/1 黒褐色微砂 (全体に炭化物多混じる) (SL1)
 8. 25YR 5/6 黄褐色細～微砂 (地山)
 SD66 10YR 3/2 黒褐色微砂 (地山ブロック塊混じる) (中質土脈消)
 5. 10YR 4/3 に近い黄褐色細砂 (SK2)

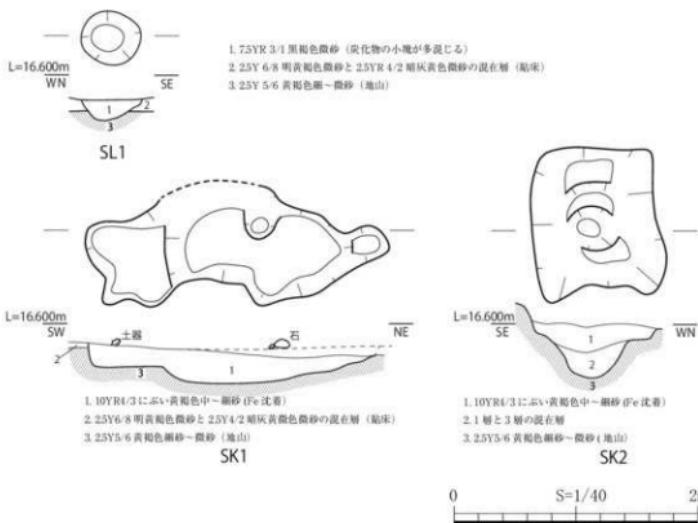
第 11 図 SI3 平面図・断面図 (S=1/60)



第 12 図 SI3 SP4・5 平面図・断面図 (S=1/20)



第13図 SI3 遺物出土位置（番号は実測図番号）(S=1/60)



第14図 SI3 SK1・2 平面図・断面図 (S=1/40)

第2項 遺物

1と2は縄文時代後～晩期の粗製深鉢底部である。1の底部裏面には網代痕が認められた。

3は弥生前期の柴山出村式土器で、器種は不明である。4は弥生中期の水神平式の土器で、壺の口縁部と考えられる。1～4は全て遺物包含層（基本層序6層）から出土したものであり、遺構に伴うものではない。

5・6はSI1に伴う土器で、壺の口縁部である。5は受口状口縁をもつ近江系壺で、粗雑ながら口縁下端に文様が施されている。

7～58はSI3の床面直上から出土した土器で、一括資料として扱う。土器についての年代は、高橋セボネ（1996）に基づいている。なお、本報告書の表2は、高橋セボネ遺跡の報告書に掲載されたものに一部加筆したものである。

7～14は全て壺である。7は広口短頸壺、8は広口長頸壺、9～12は長頸壺、13・14是有段口縁壺である。10は肩部の環状把手が欠損した丹後系把手壺である。11は大型品で、胴部は欠損しており図上で復元した。13・14は丁寧な赤彩が施されている。13は有段口縁下端に文様が施されていることから近江系と考えられる。

7～12は高橋I期、13・14は高橋II期と考えられる。13・14は加飾性が認められないものの、赤彩と丁寧なミガキ調整が施されることから祭祀系土器と考えられる。

15～28は全て壺である。15は磨滅が激しく調整は不明であるが、有段口縁がやや内傾している。17は受口状口縁をもつ近江系壺で全体に煤が付着している。18～21は大型品であり、接合の関係上、一部は図上復元に留めた。18・19・21は肩部外面にキザミが施され、口縁形態は有段化する。20は口縁形態が「く」の字口縁であり、内外面の調整も他の3点と異なる。16、22～25は底部のみであるが、プロポーションや外面調整などから壺と判断した。26は有段口縁で胎土がやや粗く、焼成も他の土器と変わらないが、内外面に赤彩が認められることから、壺である可能性がある。27・28は口縁外面に多条の擬凹線、内面に指頭圧痕が認められるが、口縁は外反しておらず、また口唇部も尖っていない。月影式系土器ではあるが、前段階の土器の影響がまだ残っていると考えられる。

17～21は高橋I期、15は高橋II期、16、22～26は高橋I・II期のいずれかと考えられる。27・28は高橋III期の範疇ではあるが、やや古相を示している。

29～46は全て高杯である。高杯は坏部が大型化する傾向と、口縁部が伸張化と外傾化する傾向がみられる。脚柱部・脚裾部の形態はバラエティーに富むようになる。被熱による磨滅が激しく調整が不明な43を除き、全ての高杯に丁寧なミガキ調整が施されている。29～31は坏部である。29は口縁端部が面取りされており、坏口縁部は内外面ともに横方向ミガキ調整、坏体部は内外面ともに縦方向ミガキ調整と赤彩が施される。30は坏体部に環状把手がついており、残存している脚部形態から棒状脚柱部であったと推測される。38は坏体部～脚部で、脚部形態は棒状脚柱部である。他の高杯と比べて坏体部が直線的に上方向に伸び、坏口縁部は急激に立ち上がる。胎土・焼成とともに良好である。32～37は棒状脚柱部をもつ脚部および脚部～脚裾部である。脚部と脚裾部の接点の様相から全て脚裾部無段脚であると考えられる。胎土・焼成とともに良好で、35・37は外面に赤彩が施される。35に比べて34・36・37の脚柱部が短いことから、後者3点の方がやや年代が下ったものであると考えられる。39～42は棒状脚柱部をもつ脚裾部有段脚である。39は口縁端部が面取りされており、口縁端部を含んだ坏口縁部全面は内外面ともに横方向ミガキ調整、坏体部は内面が横方向ミガキ調整、外面は縦方向ミガキ調整が施されている。脚柱部は不明瞭ではあるが、縦方向ミガキ調整、脚裾部は内外面ともにナデ調整が施される。裾部の透かし孔は4孔で、脚裾端部は肥厚し、面取りされている。磨滅が激しく不明瞭ではあるが、赤彩が施された可能性がある。40は口縁端部を含んだ坏部は内外面ともに横方向ミガキ調整、脚柱部及び脚裾部は外面は縦方向ミガキ調整、脚裾部内面はナデ調整が施されている。裾部の透かし孔は4孔で、脚裾端部は面取りされている。41・

42はともに脚裾部で、外面はともに縦方向ミガキ調整、内面は丁寧なヨコハケが明瞭に残るが、脚裾部付近のみナデ調整が施され、端部を肥厚させて面取りしている。41は上段部と下段部それぞれに透かし孔が4孔あり、段部には刻みによる装飾がある。42の透かし孔も4孔で、41よりも裾部の外展が目立ち、赤彩が施される。43～46は脚部外展（ラッパ状）脚である。43は磨滅が激しく、また脚部が欠損していることから図上復元とした。全体的にミガキ調整が施されていた可能性があり、内面には赤彩が施された痕跡がある。44は坏部のみ磨滅が激しい。口縁端部を含んだ坏口縁部は内外面ともに横方向ミガキ調整、坏体部も内外面ともに縦方向ミガキ調整である。脚柱部及び脚裾部は外面は縦方向ミガキ調整、脚裾部内面はケズリが認められる。裾部の透かし孔は4孔で、坏部内面に赤彩が施されていた可能性がある。45は口縁端部を含んだ坏部は内外面ともに横方向ミガキ調整、坏体部は外面は縦方向ミガキ調整である。脚柱部及び脚裾部は外面は縦方向ミガキ調整、脚裾部内面はナデ調整が施されている。裾部の透かし孔は4孔で、全体に赤彩が施される。46は脚部のみで、磨滅が激しい。外面は縦方向ミガキ調整、内面は不明であるが、脚裾部付近のみナデ調整が施され、脚裾端部は折り返されている。透かし孔は4孔で、赤彩が施される。器台または有脚鉢の脚部である可能性がある。

30・39・40～42は高橋Ⅰ期、29・31・38・43～46は高橋Ⅱ期と考えられる。

47～55は全て鉢である。47～49は有段口縁鉢、50・51は「く」の字口縁鉢、52是有脚鉢の脚部、53是有孔鉢、54は塊形鉢、55是有段口縁有脚鉢である。47は口縁部は短いもののや外傾化しており、胴部は膨らみをもたない。口縁部は内外面ともに横方向ミガキ調整、胴部は外面が縦方向ミガキ調整、内面がランダムなミガキ調整であり、内外面ともに赤彩が施される。48は口縁部の伸張化と外傾化が進み、胴部は中位が膨らむ。口縁部は内外面ともに横方向のミガキ調整で、外面のみに6条の沈線が施される。胴部は外面が縦方向ミガキ調整、内面は横方向ミガキ調整が施されている。49は口縁部の伸張化と外傾化が進むとともに外反化も進む。胴部は中位がやや膨らむ。口縁部～胴部は内外面ともに横方向ミガキ調整と赤彩が施される。底部は欠損しているが、有脚鉢であった可能性がある。50は口縁部が内外面ともにナデ調整で、外面のみに1条の沈線が施される。胴部は外面がタテハケ、内面は横方向ケズリである。他の個体と比べてやや粗雑な作りである。51は口縁部が内外面ともに粗雑なナデ調整、胴部は内外面ともにハケ調整である。器壁が厚く、粘土紐積み上げ痕が目立つ。調整が他の個体と比べて粗雑であるが、内外面ともに赤彩が施されるなどSI3から出土した土器の中では特徴的な土器である。52是有脚鉢の脚裾部である。外面は縦方向ミガキ調整であるが、裾部のみ横方向ミガキ調整が施される。内面はヨコハケで、ごく一部に炭化物が付着していた痕跡が認められる。外面は赤彩が施される。有脚鉢としているが、器台の脚裾部である可能性がある。53は小型の有孔鉢である。口縁部は短いものの外傾化しており、胴部は中位が膨らむ。口縁部～頸部は内外面ともに横方向のミガキ調整である。胴部の外面は1次調整のタテハケが認められ、2次調整はストロークが長い縦方向ミガキ調整、内面はケズリである。外面は赤彩が施される。54は粗製の小型塊形鉢である。外面は口縁部～底部までストロークが長いタテハケ、内面は指頭圧痕が明瞭に残るユビナデである。口縁端部にのみヨコナデが施される。55是有段口縁有脚鉢の口縁部の伸張化がやや進んだもので、外傾化と外反化は顕著ではない。胴部は中位が膨らむ。口縁部は内外面ともに横方向ミガキ調整、胴部は外面上半が横方向ミガキ調整、外面下半が縦方向ミガキ調整、内面はランダムなミガキ調整である。脚裾部は欠損しており不明であるが、脚柱部の外面は縦ミガキ調整、内面は丁寧なナデ調整が施される。全体的に精緻な成形・調整である。

47・48・49・53・54は高橋Ⅱ期、50・51・55は高橋Ⅰ・Ⅱ期と考えられる。52は時期不明である。

56～58は全て器台である。56は棒状脚柱部をもつ有段脚器台、57は外展（ラッパ状）脚器台、58は太筒脚柱部有段受部器台である。56は受部口縁の外面は横方向ミガキ調整、それ以外は縦方向ミガキ調整である。脚

部外面は縦方向ミガキ調整、内面はケズリが残るもの丁寧なナデ調整が施される。脚裾部は外面は縦方向ミガキ調整で、段部のみ横方向ミガキ調整が認められる。内面はヨコハケである。裾部の透かし孔は4孔である。全体的に精緻な作りであるが赤彩は施されず、また受部より台部が小型化する傾向の器台である。57は脚部のみであるが、高杯や有脚鉢のように坏部と脚部を別々に作った後に接合した痕跡がないこと、脚部に透かし孔があることから器台脚部と判断した。外面は縦方向ミガキ調整、内面はミガキ調整ではないが、棒状工具による細かく丁寧な押圧が施される。裾部の透かし孔は3孔である。58は受部口縁の外面は12条の擬四線、内面は横方向ミガキ調整である。脚部は磨滅が激しく不明瞭であるものの、外面はハケと縦方向ミガキ調整、内面はハケである。脚部のミガキ調整は単位幅が5～10mm程度あり、ミガキ調整というよりは細かな面取りのような様相を示す。

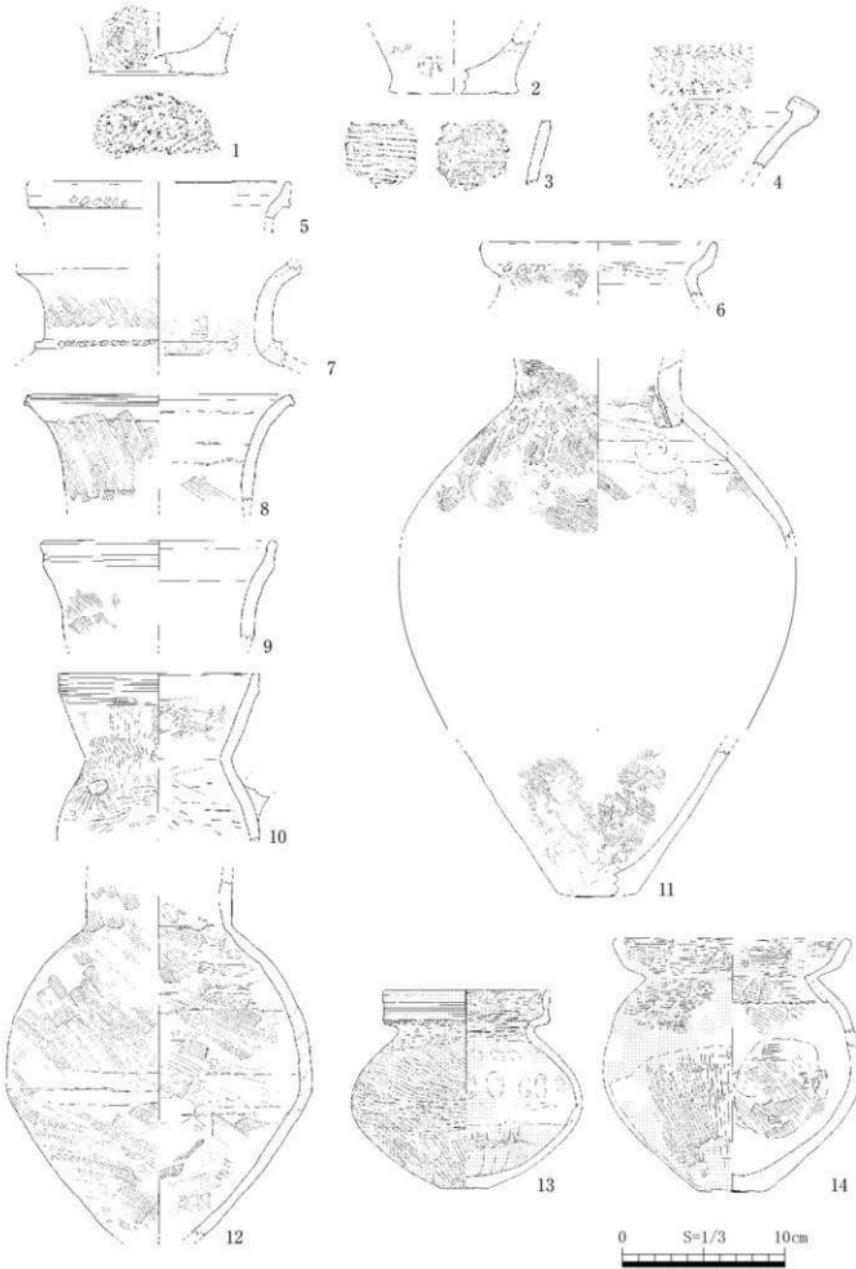
56・58は高橋I期、57は時期不明である。

59～63は基本層序5・6層(第4図)から出土した弥生土器で、残存率の良いものを取り上げている。59～61は甕または壺の底部、62は高杯の環状把手、63是有脚塊形鉢の脚部である。

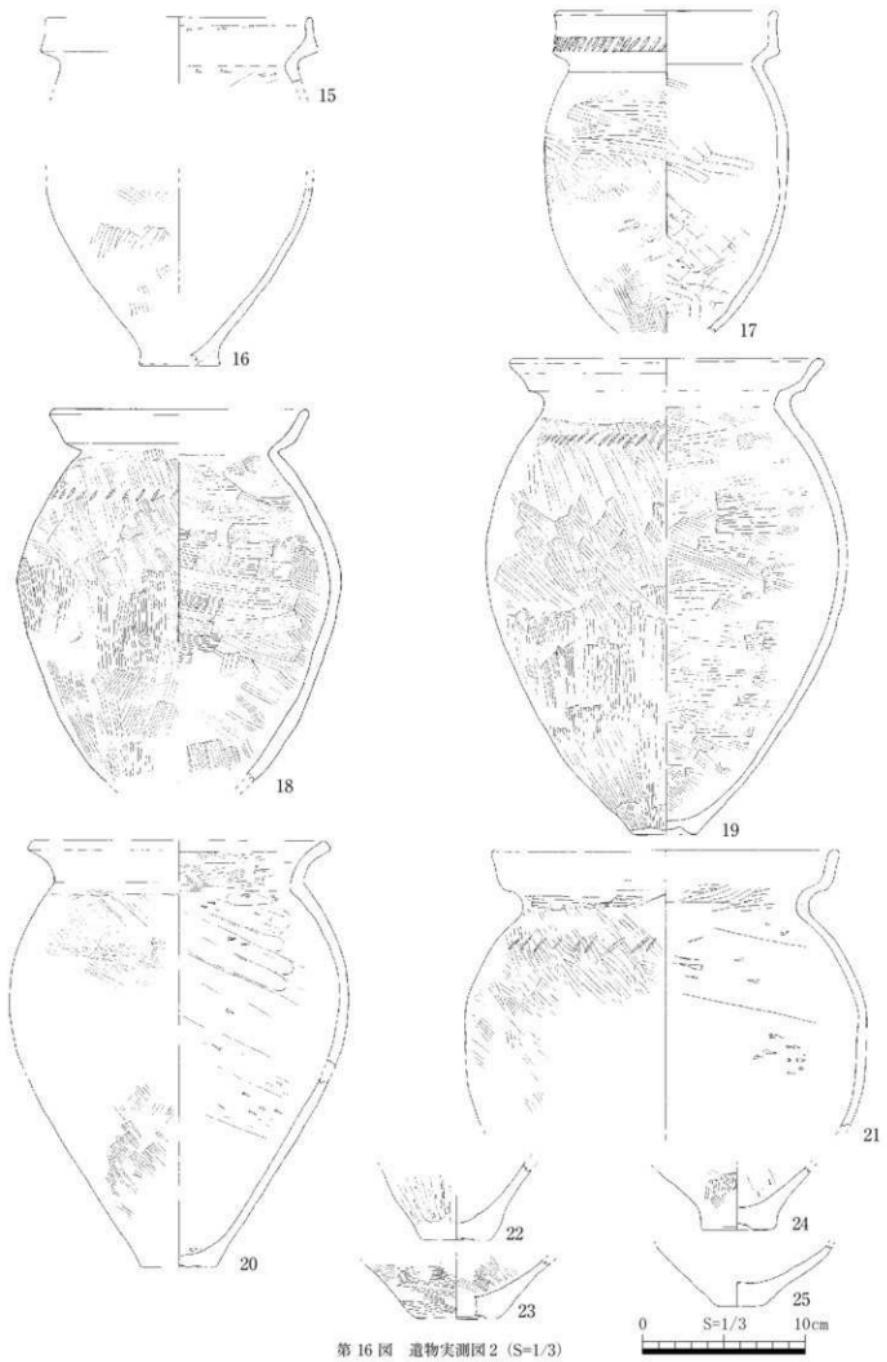
64-65はSI3から出土した石製品である。64は磨石の破片である。被熱している。65は凹石である。被熱しており、またごくわずかに煤が付着している。SI3から出土した石製品はこの2点のみである。

表2 弥生土器編年

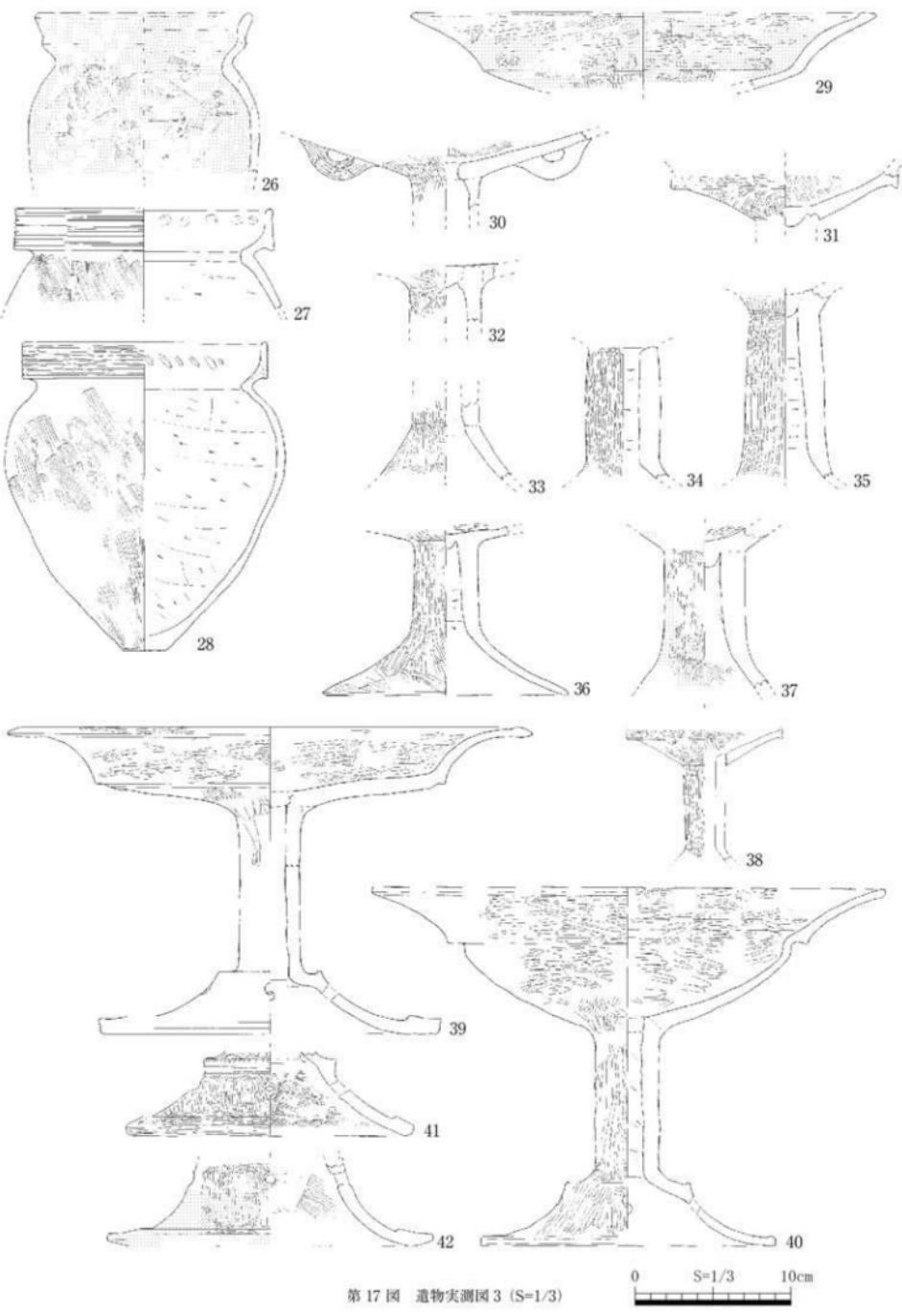
時期区分	形式・様式	谷内尾	西念II・III	西念IV		高橋セボネ
弥生時代 後期後半	法仏式	法仏式(古)	7期	3期	1	
			8期		2	I期
		法仏式(新)	9期		3	II期
					4	
弥生時代 末期	月影式	月影I式	10期	4期	1	III期
			11期		2	
					3	
					4	



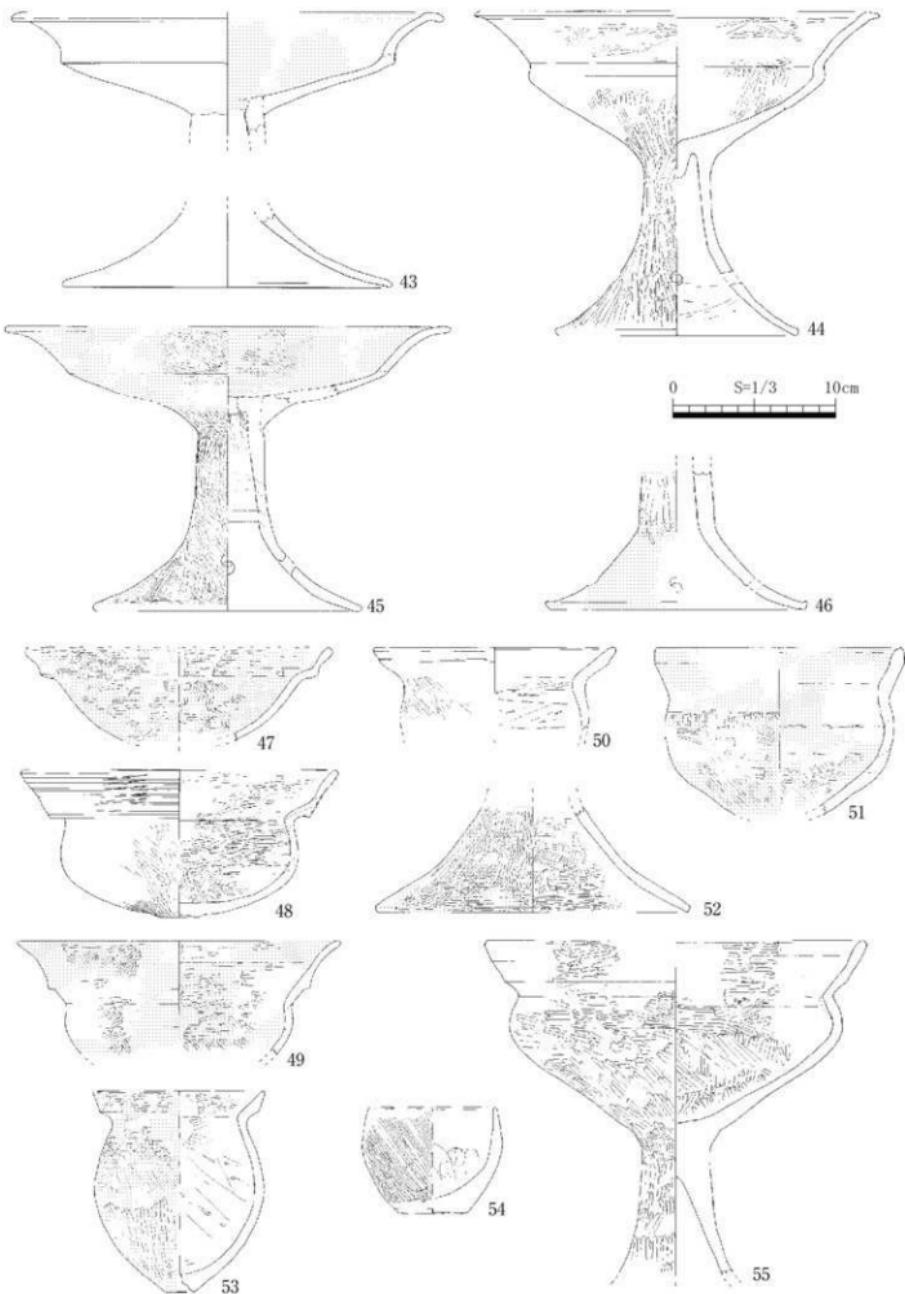
第 15 図 遺物実測図 1 ($S=1/3$)



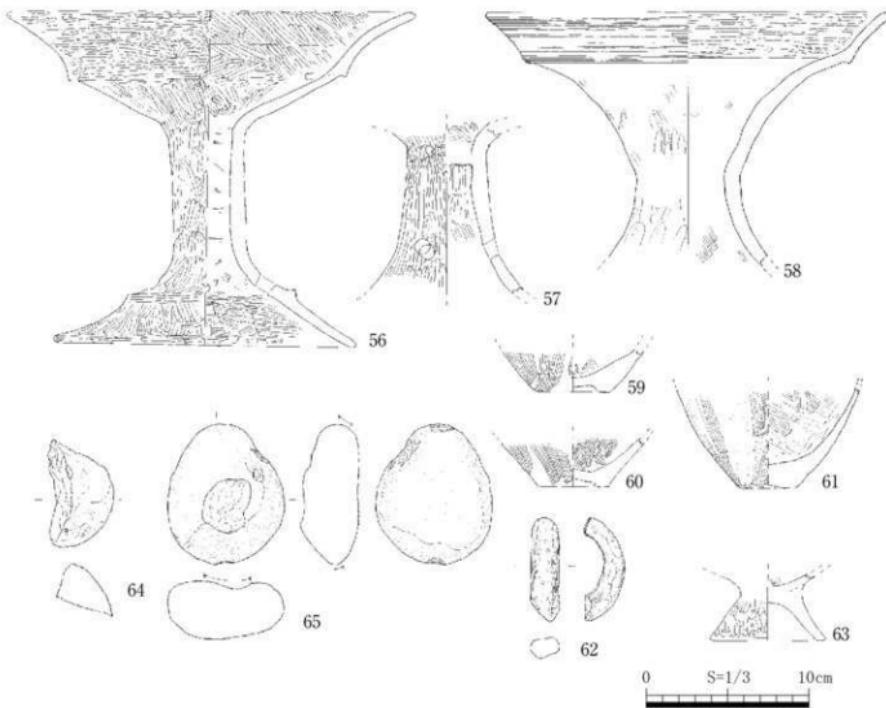
第 16 図 遺物実測図 2 (S=1/3)



第 17 図 遺物実測図 3 (S=1/3)



第18図 遺物実測図4 (S=1/3)



第19図 遺物実測図5 (S=1/3)

第2節 古代

第1項 遺構

古代の建物について明確に判明しているものは、SB1～SB4の4棟と、それらの遺構に切られたSD78などの溝である。遺構については調査区北側から順に述べる。

掘立柱建物

SB1(第20図)

調査区の北寄り西壁近くで検出した南北2間、東西2間の総柱建物である。建物の主軸はN7°-Wとやや西に振っている建物である。建物規模は、南北柱間が1.8～1.9m、東西柱間が1.7～1.8mで、やや南北に長い。柱穴の掘方は隅丸方形であったと推測でき、後世の搅乱や柱の抜き取り痕によって変形しているものの、掘方の大きさは一辺約1.0m、深さは約40cm以上であったと考えられる。

出土遺物については後に述べるが、SB1は基本層序6層に覆われた遺構であって、遺物から建物は8世紀後半～9世紀を下らない時期のものと考えられる。

SB2(第21図)

調査区の北端北壁近くで検出した南北2間、東西2間の総柱建物である。建物の主軸はN8°-Wとやや西に振っているが、SB1とはほぼ同軸の建物である。建物規模は、南北柱間が1.9～2.0m、東西柱間が1.9～2.0mとほぼ正方形である。柱穴の形は隅丸方形で、後世の搅乱や柱の抜き取り痕によって変形しているものの、掘方の大きさは一辺約0.9m、深さは約60cm以上であったと考えられる。柱穴SB2-5では柱痕が認められており、腐植による

土質の変化等を考慮しても直径 20cm 以上の柱材が使用されていたと考えられる。

出土遺物については後に述べるが、SB2 は基本層序 6 層に覆われた遺構であって、遺物から建物は 8 世紀後半～9 世紀を下らない時期のものと考えられる。

SB3 (第 22 図)

調査区北寄りの西壁で検出した南北 3 間以上の掘立柱建物である。建物の東辺のみを検出したため東西規模は不明である。東辺が建物の主軸と同じであると仮定した場合、建物の主軸は N5° - W とやや西に振っているが、SB1・2 とほぼ同軸の建物である。ただし、SB3 については未掘削または削平された部分に柱穴があった可能性が高く、その場合、推定の主軸からさらに大きく西に振る可能性がある。建物規模は、南北柱間が 1.6 ~ 2.2m、東西柱間は不明である。柱穴の形や規模は不明である。

出土遺物については後に述べるが、SB3 は基本層序 6 層を掘りこんだ遺構であって、遺物からも SB1・2 とは併存せず、やや年代の下る時期の建物であると考えられる。

SB4 (第 23 図)

調査区の北寄り東壁近くで検出した南北 5 間、東西 2 間以上の掘立柱建物である。建物の主軸は N6° - W とやや西に振っているが、SB1・2・3 とほぼ同軸の建物である。建物規模は、南北柱間が 2.0 ~ 2.5m、東西柱間が 2.5 ~ 3.0m で、南北約 11m、東西 5m を超える大型建物である。柱穴の形は隅丸方形で、後世の搅乱によって変形しているものの、掘方の大きさは一辺約 0.9m、深さは約 70cm 以上であったと考えられる。柱穴 SB4-2 では柱痕が認められており、腐植による土質の変化等を考慮しても直径 20cm 程度の柱材が使用されていたと考えられる。

出土遺物については後に述べるが、SB4 は基本層序 6 層より下層の遺構であることから、建物は 8 世紀後半～9 世紀を下らない時期のものと考えられる。

その他の遺構

SD78 (第 7 図)

調査区北東隅で南北方向に延びている溝である。掘方は明瞭で、溝幅は約 0.7m である。溝底の標高は南北で大きく異なり、北側が標高 16.27m、南側が 16.62m と北低南高で、その差は約 35cm である。遺物は出土しておらず時期は不明であるが、SB2 に切られていることや埋土の様相から 8 世紀後半以前の遺構であると推測される。

SD62 (第 7 図)

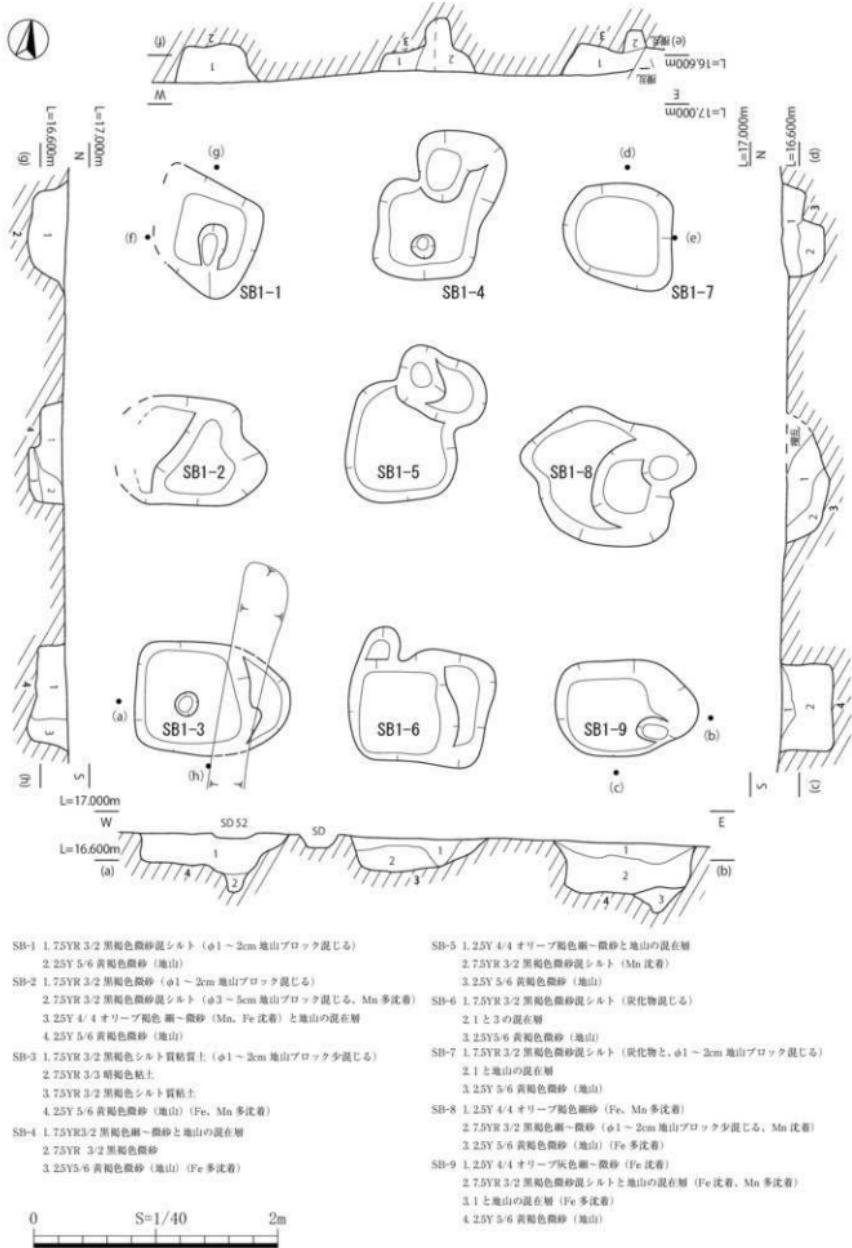
調査区北側で東西方向に延びている溝である。溝の様相は東西で大きく異なり、西側の溝幅は約 1.0m、深さは約 30cm で、掘方は明瞭である。対して東側は、溝の掘方を明確に捉えられず、幅広でなだらかな自然の凹みのような様相を呈していた。溝底の標高は西低東高で、その差は約 30cm である。基本層序 5 層を切っていることから SB1 ~ 4 よりは時期は下るもの、出土遺物はすべて 9 世紀までにおさまることから、中世までは下らないと判断した。

SD82・88 (第 8 図)

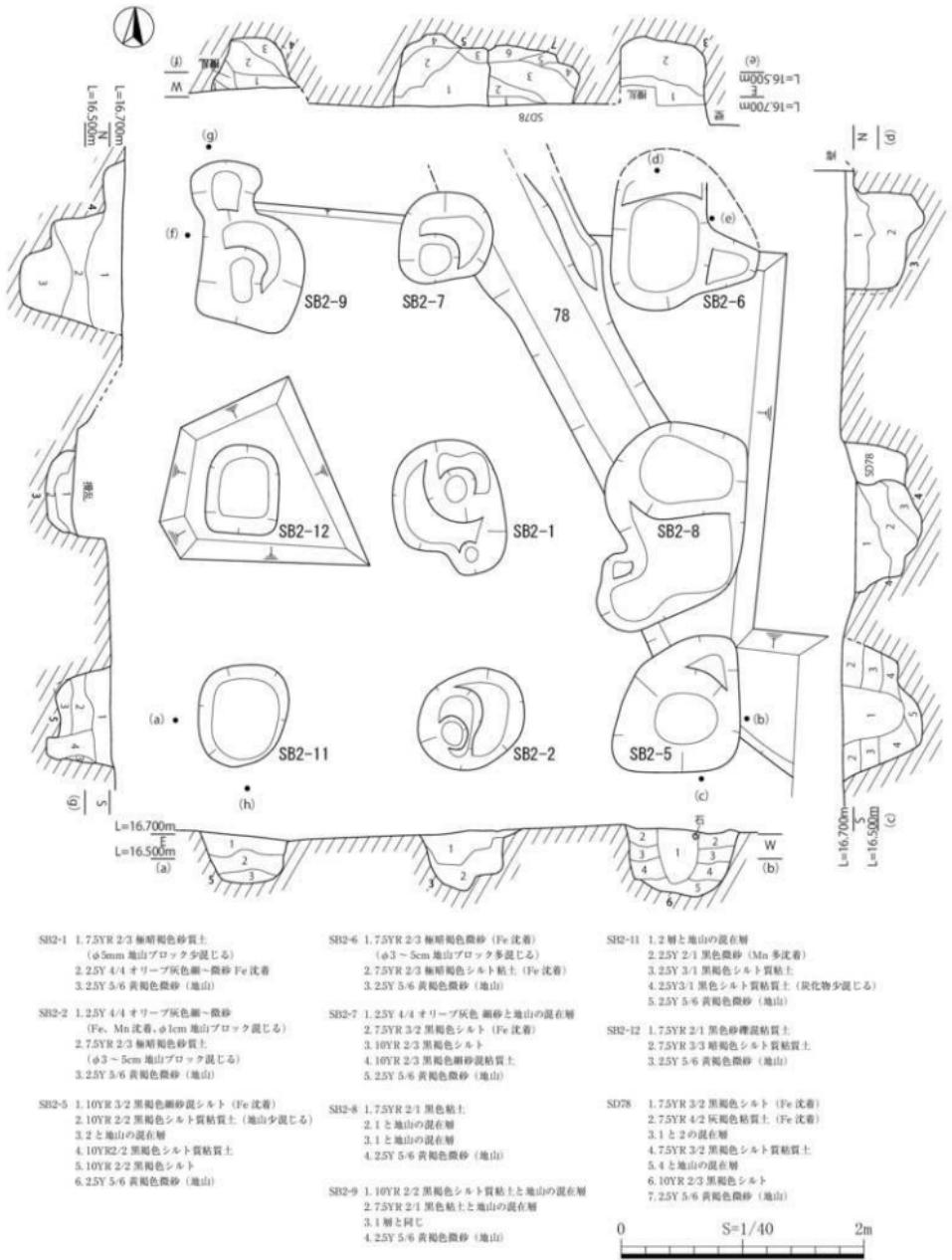
調査区中央北寄りで東西方向に延びている溝である。後世の搅乱のため途中で途切れたり、検出当初は同一遺構と判断できなかったことから西側を SD82、東側を SD88 としている。溝の様相も SD62 と同じであり、西側は明瞭で東側は判然としない。西側の溝幅は約 40cm、深さは約 20cm である。対して東側は、溝が幅広でなだらかな自然の凹みのような様相を呈していた。溝底の標高は西低東高で、その差は約 15cm である。SD62 との併存は不明であるが、SD80・81 に切られ、中世の遺物が出土しないことから当時の遺構であると判断した。

SD159 (第 8 図)

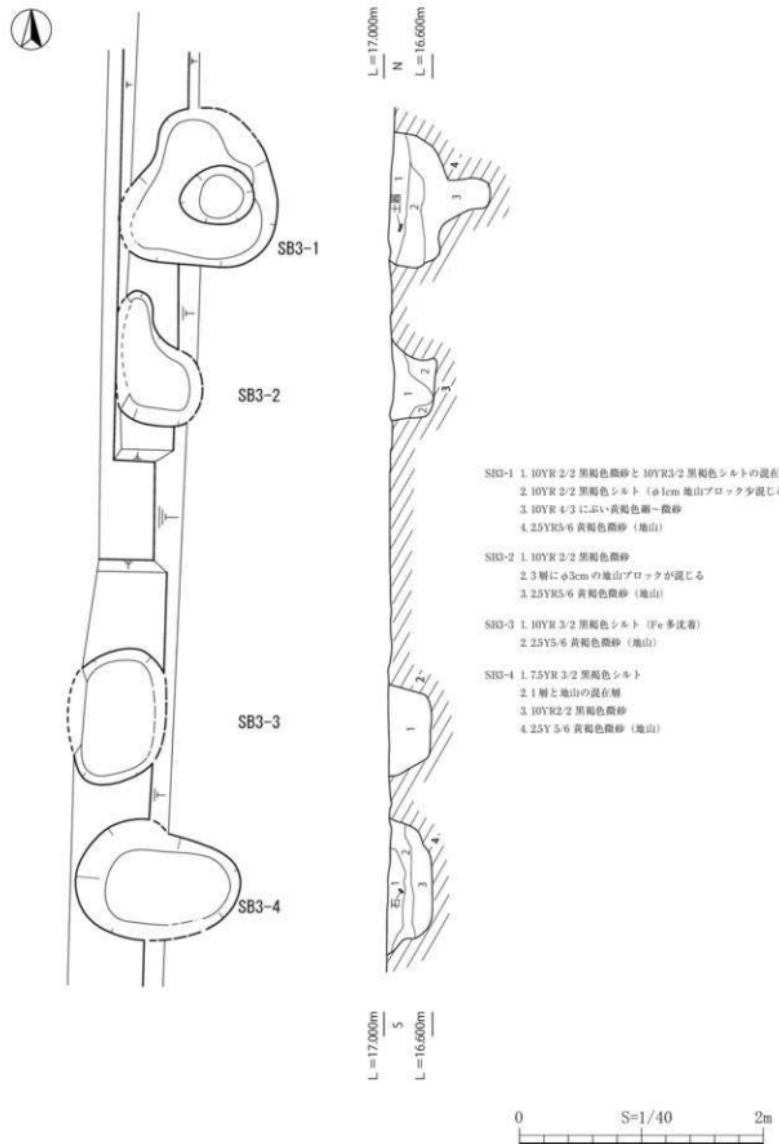
調査区中央南寄りで東西方向に延びている溝である。溝幅は約 0.8 m、深さ約 20cm で、掘方は明瞭である。SD50 に切られ、中世の遺物が出土しないことから当時の遺構であると判断した。



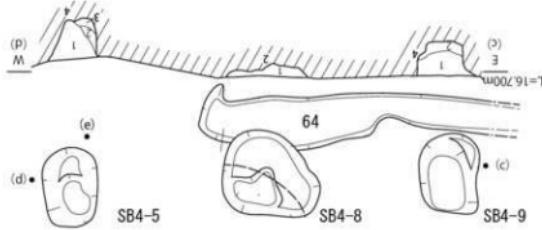
第20図 SB1 平面図・断面図 (S=1/40)



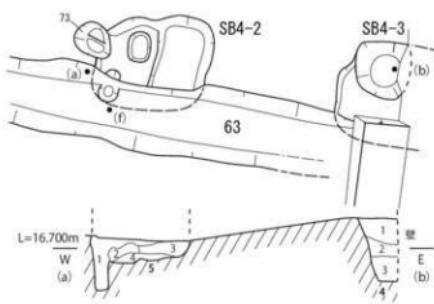
第 21 図 SB2 平面図・断面図 (S=1/40)



第 22 図 SB3 平面図・断面図 (S=1/40)



- SB4-1 1. 7.5Y 4/4 オリーブ灰色細砂
2. 1解と地山の混在層
3. 2.5Y 5/6 黄褐色細砂（地山）
SB4-2 1. 7.5Y R 3/3 黑褐色細砂質土（φ3～5cm 地山ブロック混じる）
2. 1解と地山の混在層
3. 7.5Y R 3/2 黑褐色細砂～微砂（φ1～2cm 地山ブロック混じる）
4. 3解と地山の混在層
5. 2.5Y 黄褐色細砂（地山）
SB4-3 1. 10YR 2/3 黑褐色細砂質土
2. 10YR 2/3 黑褐色細砂（地山ブロック・炭化物混じる）
3. 10YR 2/3 にぶい 黄褐色細砂質土
4. 2.5Y 5/6 黄褐色細砂（地山）
SB4-4 1. 10YR 3/2 黑褐色細砂（地山ブロック・炭化物混じる）
2. 2.5Y 5/6 黄褐色細砂（地山）
SB4-5 1. 10YR 3/2 黑褐色細砂（地山ブロック・炭化物混じる）
2. 2.5Y 2/1 黑褐色～微砂（地山ブロック混じる）
3. 2解と地山の混在層
4. 2.5Y 5/6 黄褐色細砂（地山）
SB4-6 1. 10YR 2/3 黑褐色細砂（地山）
2. 2.5Y 5/6 黄褐色細砂（地山）
SB4-7 1. 10YR 2/3 黑褐色細砂（地山ブロック・炭化物混じる）
2. 2.5Y 2/1 黑褐色～微砂（地山ブロック混じる）
3. 2.5Y 5/6 黄褐色細砂（地山）
SB4-8 1. 10YR 3/2 黑褐色細砂（地山ブロック・炭化物混じる）
2. 2.5Y 5/6 黄褐色細砂（地山）
SB4-9 1. 10YR 3/2 黑褐色細砂（地山ブロック・炭化物混じる）
2. 2.5Y 2/1 黑褐色～微砂（地山ブロック混じる）
3. 2解と地山の混在層
4. 2.5Y 5/6 黄褐色細砂（地山）



0 S=1/60 2m

第23図 SB4 平面図・断面図 (S=1/60)

第2項 遺物

土器についての年代は、田嶋編年(1988)に基づいている。遺物の多くは残存率が低く、詳細な年代の判断が難しいが、その多くは田嶋Ⅲ期～Ⅳ期の範疇であると考えている。

66・67はSB1に伴う土器である。66は土師質の小型壺煮炊具で、口縁部は丁寧なヨコナデが施されており、口縁端部内面には炭化物が付着している。田嶋Ⅲ～Ⅳ期と判断した。67は須恵器の有台杯である。

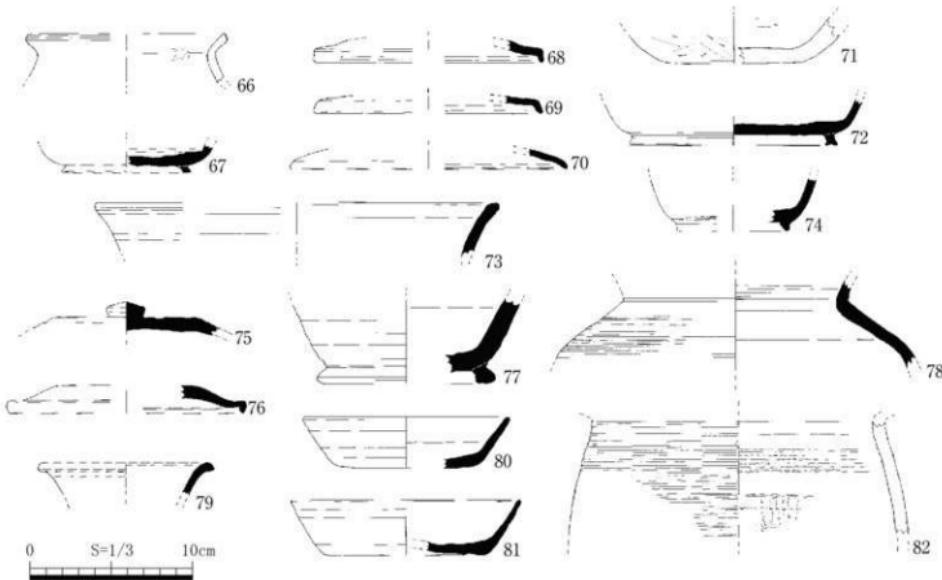
68・71・74はSB2に伴う土器である。68は須恵器杯蓋、71は土師器小型壺、74は須恵器小型壺である。71は底部のみの残存であるが、底部外面・体部側面下方にヘラケズリが施されている。9世紀に出現する土師器食膳具であると考えられるが、外面の赤彩、内面の黒色処理などは確認できなかった。74は小片ではあるが、底部からの立ち上がり角度から壺と判断した。

75～78はSB3に伴う土器である。75・76は杯蓋、77は壺底部、78は壺頸部～肩部である。75はツマミの頂部が突出しており、田嶋Ⅳ期を下らないと判断した。

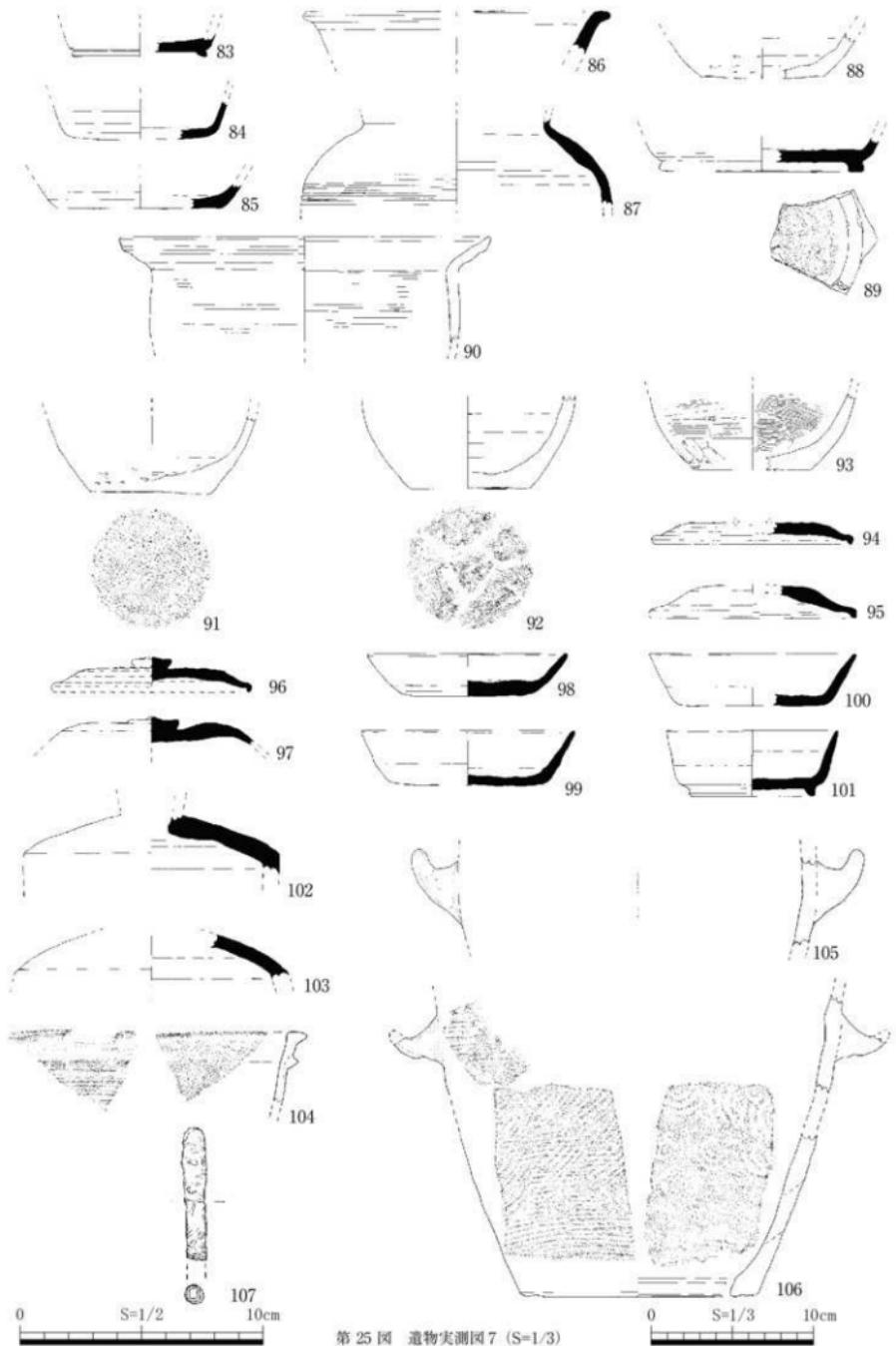
69・70・72・73・79～82はSB4に伴う土器である。69・70は須恵器杯蓋、72は須恵器有台杯、73は須恵器壺口縁、79は須恵器瓶口縁部、80・81は須恵器杯、82は土師器長胴壺である。70は69に比べて口縁端部の折り返しが緩やかである。72は底部が平たく偏平器形であることから田嶋Ⅳ期と判断した。79は小片ではあるものの、器壁が薄く、内外面に自然釉がかかっており、おそらくは長頸瓶の口縁である。

83～89はその他の遺構から出土した遺物である。遺構の時期判断材料としては乏しいが、残存率が高いもの、特徴的なものを選んだ。

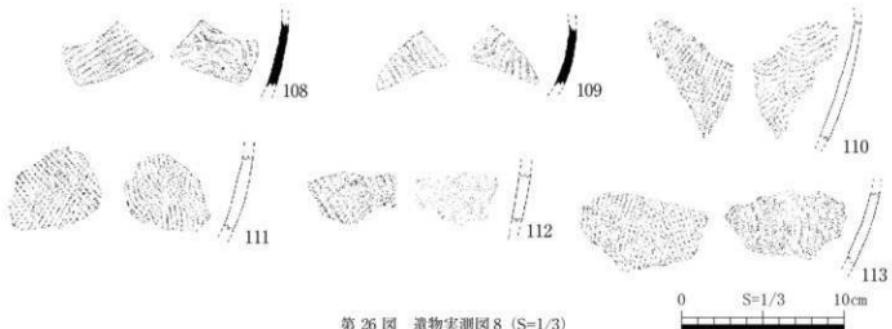
90～113は遺構面の直上を覆っている基本層序5・6層から出土した遺物である。残存率が高いもの、特徴的なものを選んだ。90の長胴壺は口縁が大きく頸部の反りが強いことから、田嶋II期～III期の可能性がある。同時期の遺物で、106の瓶は破片に接点が認められないが、胎土や焼成から把手と胴部が同一個体であると判断した。



第24図 遺物実測図6 (S=1/3)



第25図 遺物実測図7 (S=1/3)



第 26 図 遺物実測図 8 (S=1/3)

108・109は胎土と焼成が他の須恵器と異なり、また器壁も薄い。110～113は調整が他の土師器と異なる。これらは韓式系土器と考えられる。

第3節 中世

第1項 遺構

中世の遺構は溝やピットなどが主であり、建物跡は認められなかった。しかし、柱列として並ぶ遺構はないものの、柱穴と考えられるピットが散見される。遺構については調査区北側から順に述べる。

SD51・80・81・111・112 (第7・8図)

調査区北側西壁付近で南北方向に延びている小溝群である。途切れつつも規則的に連続している。溝幅は15～20cm、深さは10～15cmで、U字状の掘方である。遺物は出土していない。SB1・SD82を切っているものの、SD62・63の直上で平面検出ができなかったことから、中世より古い年代の遺構である可能性も考えられる。

SD63 (第7図)

調査区北側で東西方向に延びている溝である。SD62を切っている。溝幅は約1.0m、深さは約60cmで、掘方は明瞭である。遺物は古代のものが主であるが、中世土師器皿が出土していることから当時期の遺構と判断した。

SD50 (第8図)

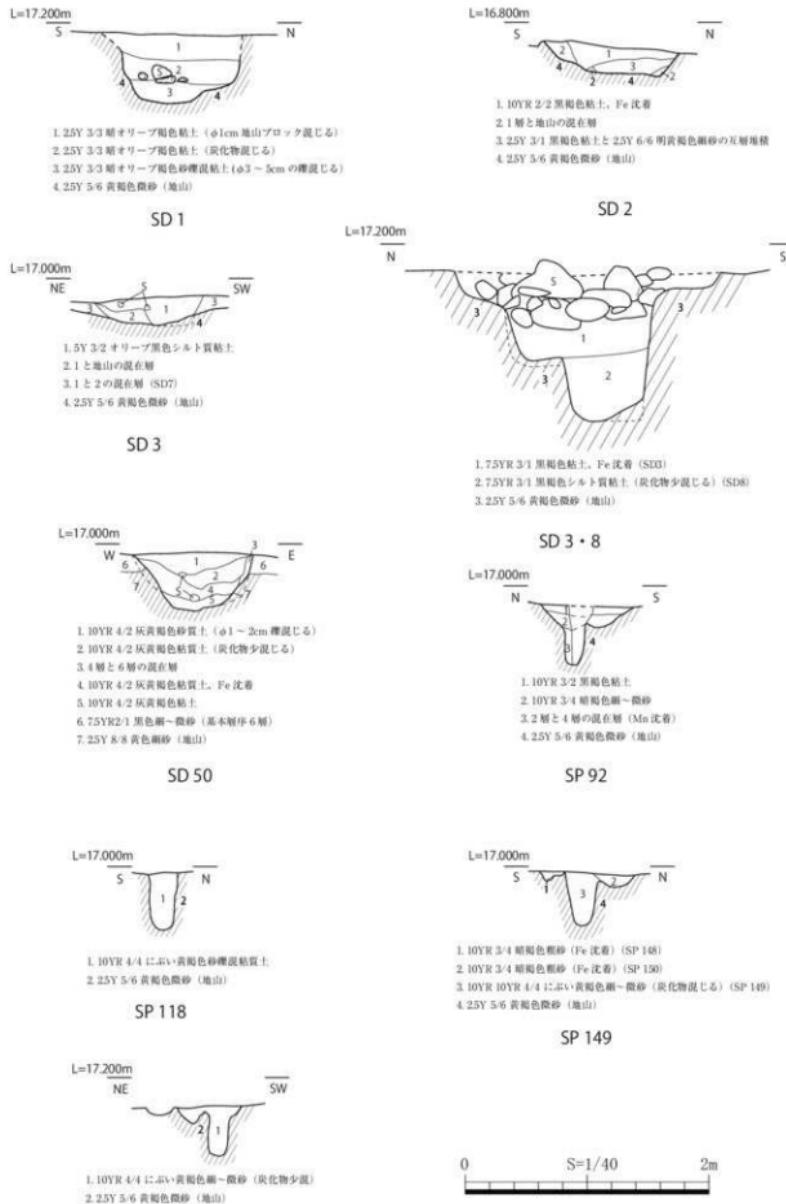
調査区中央東側で南北方向に延びている溝である。溝幅は約1.0m、深さは約50cmである。掘方は明瞭である。SD1～3・8の埋土と異なり、ラミナが認められることから、人為的に埋められたものではなく、緩やかな水性堆積であったと考えられる。遺構密度の高い場所から鞍部に向かって延びていることから、排水機能をもつ溝であったと考えられる。遺物は中世土師器皿のみである。

SD173・174 (第8・9図)

調査区中央にある格子状の溝群である。溝幅は1.0～0.3mとまばらであるが、深さは全て15cm前後である。これら溝の切り合は平面・断面ともに確認できなかった。また、それぞれが溝として独立するものかどうかも判断できなかったことから一括の遺構とした。耕作遺構、畠状遺構、区画溝などではなく、用途は不明である。遺物は少量であるが中世土師器皿が出土している。

SD3・SD8 (第9図)

ともに調査区南側で東西方向に延びている溝である。SD3は溝幅は約1.0m、深さは約30cmである。SD1・2と方位を同じくしている。溝の東端付近のみだけではあるが、埋土上層に人頭大から拳大の巨礫が多量に投げこまれており、溝を放棄する際にこれら巨礫と一緒に埋めたと考えられる。遺物は中世土師器皿が主であるが、陶磁器も出土している。SD8はSD3の下層にある遺構である。SD3と重複する部分が大きく、SD8としての明確な掘



第 27 図 SD1・2・3・8・50、SP92・118・149・157 土層断面図 (S=1/40)

方はSK30付近から調査区東壁までしか捉えられなかった。SD3の下層で確認できる限りで、溝幅は約40cm、深さは約30cmである。ほぼ垂直に掘りこまれており、掘方断面は方形である。両遺構の出土遺物に時期差がみられないことから、先にSD8があって、時期をあけずに溝幅を掘り広げたものがSD3と考えられる。

SD2(第9図)

調査区南側で東西方向に延びている溝である。溝幅は約1.0m、深さは約20~40cmである。SD1と方位を同じくしているが、SD2の東半は擾乱の有無に関わらず認められなかつたことから、SD1とは異なり、途中で途切れる溝であったと考えられる。遺物は出土していない。

SD1(第9図)

調査区南端で東西方向に延びている溝である。後世の搅乱のため溝の上半はほぼ失われているが、溝幅は約1.2m、深さは約60cmで、掘方は明瞭である。埋土中層にはSD3と同じく人頭大の巨礫が多量に投げこまれておらず、溝を放棄する際にこれら巨礫と一緒に埋めたと考えられる。遺物は中世土師器皿のみである。

その他の遺構

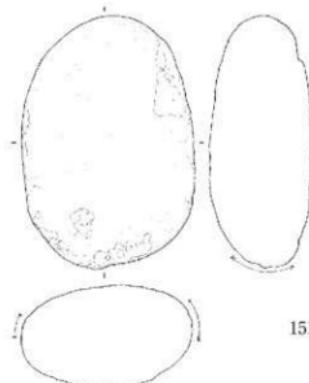
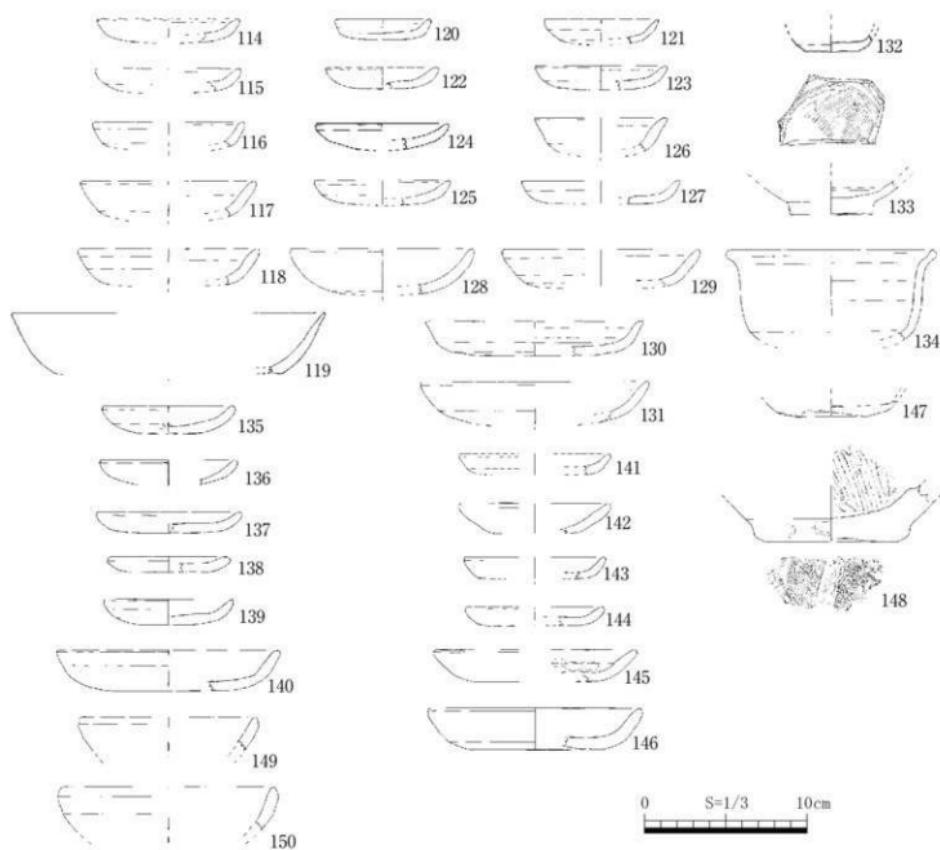
SD50北側やSD2・3北側東寄りにピットや土坑が認められた。その多くが直径は20cm前後、深さは10~20cmである。多くが灰色~黄褐色の砂質系埋土で、少量かつ小片ではあるがいくつかの遺構から中世土師器皿が出土することなどから、これら遺構を当時期のものであると判断した。先にも述べたが、いくつか柱穴らしき遺構が認められることから、それらの断面は第27図に掲載した。

第2項 遺物

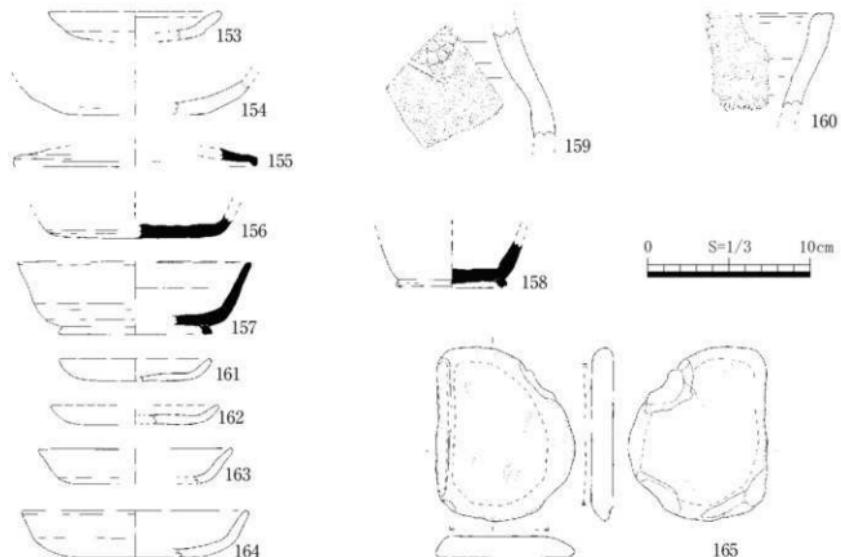
土器についての年代は、藤田(1989)を参考としている。中世土師器皿については残存率が低いものが多く、口径や器高等の値はその復元であることを記しておく。遺物の多くは中世土師器皿である。これらは全て14世紀の範疇であると考えている。また、ごくわずかではあるが、陶磁器が出土している。

114~119はSD1に伴う中世土師器皿である。全て小片ではあるが、各個体は良好な状態である。114~116は口径9.0cm前後、器高1.3cm前後であり、117~119は口径11.0cm前後、器高1.5~2.0cm前後であって、法量は大小2種類に分けられる。全て非クロロ系の土師器皿であるが、小法量の土師器皿は口縁と底部の意識があいまいな丸底であり、大法量の土師器皿は口縁の立ち上がりが明瞭で底部が意識された作りとなっている。これらは14世紀のものであると判断した。

120~134はSD3に伴う土器である。120~131は中世土師器皿であり、破片ではあるが各個体は良好な状態である。120~126は口径6.0~8.0cm前後、器高1.3cm前後、127~130は口径10.0~12.0cm前後、器高1.5~2.0cm前後である。多少ばらつきはあるものの法量が大小2種類に分けられ、全て非クロロ系の土師器皿である。小法量の土師器皿は丸底であり、大法量の土師器皿は底部が意識された作りである点は先述の土師器皿と同じである。124のみ口縁に灯芯油煙痕が認められ、灯明皿であったことがわかる。131は口径14.0cm、器高2.5cmと大型であるが、非クロロ系の土師器皿で、口縁と底部の意識があいまいな丸底である。これらは14世紀後半のものであると判断した。132は陶器である。器種は不明であるが、高台が無いこと、底径が小さいことから小壺などの底部と考えられる。内面に自然釉の付着が認められる。胎土は小礫が混じり精緻ではない。133は青磁碗の底部である。見込みには櫛またはハケによって文様が描かれ、碗部内外面にも何らかの線描が確認できる。釉薬は薄く、ややオーリーブ色がかった灰色を呈している。高台は、豊付外面削りだしは明瞭で高いが、豊付内面は1mmほど削ったのみでごく低く、豊付自体の幅も2mmほどである。胎土は灰白色で精緻であるが、ごく小さな黒い粒子が混じる。134は古瀬戸の塊または壺である。胴部はやや下膨れで、口縁は頸部で外反しながらも口縁端部は垂直に立ちあがるなどの特徴から、塊とはしたものの香炉などの可能性も考えられる。現存部分は全て施釉されて



第28図 遺物実測図9 (S=1/3)



第29図 遺物実測図10 (S=1/3)

おり、全体に細かな貫入が認められる。古瀬戸は14世紀を下らないものと判断した。135～137はSD8に伴う中世土師器皿で、SD3の小法量土師器皿と同時期のものである。

138～146は様々な遺構に伴う中世土師器皿で、小法量・大法量土師器皿ともにあるが、全て14世紀のものであると判断した。

147・148はSK183に伴う土器である。SK183は掘方が明瞭でなく、深さも約15cm程度の浅い土坑であったが、埋土にはSD1・3と同じく拳大の巨礫が多量に含まれていた。土器はそれら礫と混ざるように出土したものである。147は青磁杯または皿の底部である。無文で釉薬は薄く、深みがかった青灰色を呈している。高台は、平底の中央をヘラで削り、低い高台があるようにみせている。底部は施釉されておらず、胎土は灰色で精緻である。148は珠洲焼の鉢の底部で、14～15世紀のものであると判断した。

153～160はSD63に伴う土器である。153は今次調査で出土した土師器皿の中ではやや新しい様相を示しており、14世紀後半から15世紀のものである。159は加賀焼の壺で菊文花の押印がある。160は珠洲焼の鉢口縁である。159・160はとともに14世紀のものであると判断した。

161～164はSD50に伴う中世土師器皿である。小片であり、口径10.0cm～16.0cm、器高1.5～3.0cmとばらつきがあるが、全て非ロクロ系の土師器皿である。製作技法や法量などから他の土師器皿と同時期のものであると判断した。

第5章 総 括

第1節 調査結果の総括

弥生時代については、高橋セボネ遺跡と同じく焼失住居を検出した。類似点も多いが、当遺跡の焼失住居は、

土器出土量が極めて多く、器種が多様かつ年代に幅があり、土器の被熱は確認できるものの焼土が出土しないなど異なる点もある。また、石川県立埋蔵文化財センター（以下、県センター）が実施した既往調査区北端（今次調査区の南東端付近にあたる）から竪穴建物2棟が検出されており、それ以南では検出されないことから、高橋セボネ遺跡を中心とした弥生時代後期集落の南限が今次調査区付近であることがわかる。

古代については、掘立柱建物4棟を検出した。高橋セボネ遺跡では、古代の掘立柱建物は3棟検出されており、8号掘立柱建物は9世紀後半、2号・8号掘立柱建物は古代以降である。8号掘立柱建物は南北約8.0m、東西約4.4mの掘立柱建物で、柱間や掘方等は今次調査のSB1～4と似るが、建物の主軸はN13°-Wと異なっている。県センターが実施した当遺跡の既往調査では、2棟の掘立柱建物が検出されており、SB201は10世紀以降、SB202は8世紀頃の建物である。SB201は南北約9.0m、東西4.5m以上の掘立柱建物で、建物の主軸がN12°-Eである。SB202は南北2間、東西2間の総柱建物で、建物の主軸はN4°-Wとほぼ南北方向の建物である。SB202は主軸方位、柱間、柱掘方の形や規模、深さなどが今次調査のSB1～4と類似する。また、高橋セボネ遺跡の8号掘立柱建物と当遺跡のSB201は類似する。このことから、少なくとも8～10世紀の間、倉庫やそれに類する施設が、微高地の広い範囲で場所を移動しながら継続して繰り返し建てられてきたことがわかる。

中世については、溝や土坑、ピットなどを検出した。高橋セボネ遺跡では中世の遺構は検出されておらず、遺物も出土していない。県センターが実施した当遺跡の既往調査では、建物等は検出されていないが、廐棄土坑、土坑、ピット、竪穴状遺構、井戸、溝などが検出されており、それに伴う遺物も多く出土している。遺構埋土中に多量の礫が投棄されている点は今次調査の遺構埋土と類似する。また、土師器廐棄土坑の中世土師器皿の年代は「鎌倉・室町時代」とあるが、およそ13世紀後半～14世紀のものとみられ、今次調査から出土した中世土師器皿とほぼ同時期のものである。このことから、扇が丘ゴショ遺跡を中心とする14世紀を盛期とした集落があったと推測される。

第2節 まとめ

県センターが実施した既往調査では、当遺跡は南西から北東方向にのびる痩せ尾根状微高地にあって、遺構密度から当遺跡がさらに西側と北側に広がる可能性があること、改修された現在の高橋川によって現在は分断されているものの、北隣にある高橋セボネ遺跡と当遺跡が本来は一連の遺跡であることが指摘されていた。今次調査はそのことが明確となった調査であるといえるであろう。

微高地にある当地では、不断ではないものの、時代ごとに集落主体部を変えつつ弥生時代から現在まで続く連續的な生活域であることがわかった。

【参考文献】

- 垣内光次郎ほか 1988 「佐々木アバタケ遺跡Ⅰ」石川県立埋蔵文化財センター
本立雅朗 1998 「扇が丘ゴショ遺跡」石川県立埋蔵文化財センター
橋 正勝 1989 「西念・南新保遺跡Ⅱ」金沢市・金沢市教育委員会
橋 正勝 1992 「西念・南新保遺跡Ⅲ」金沢市・金沢市教育委員会
橋 正勝 1996 「西念・南新保遺跡Ⅳ」金沢市・金沢市教育委員会
越坂一也 1987 「中世集落の変遷と土器の組成」『永木ガマノマガリ遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
高橋浩二 2002 「北近畿系統の土器と山陰系統の土器－越中弥生後期・終末期における日本海沿岸交流の所段階－」『富山大学人文学部紀要』37 富山大学人文学部
田嶋明人 1986 「漆町遺跡Ⅰ」石川県立埋蔵文化財センター
田嶋明人 1988 「古代土器編年軸の設定」『シンボジウム北陸の古代土器研究の現状と課題 報告編』
谷口宗治 1995 「金沢市鶴見カネカヤブ遺跡」金沢市・金沢市教育委員会
田村昌宏ほか 1996 「高橋セボネ遺跡」石川県野々市町高橋第一土地区画整理組合・石川県野々市町教育委員会
田村昌宏 2014 「徳用カヤダ遺跡Ⅱ」石川県野々市市教育委員会
中世土器研究会・宮田進一 1995 「各地の土器様相 5.北陸」〔概説 中世の土器・陶磁器〕真陽社
藤田邦雄 1989 「中世土器素描」『北陸の考古学Ⅱ』石川考古学研究会
北陸中世土器研究会編 1997 「中世加賀国の中世土器様相」『中・近世の北陸』桂書房

表3 遺物観察表

番号	遺構 出土位置	器種	口径 (mm)	残存高 (mm)	底径 (mm)	調整(外)		色調(外) 色調(内)	残存率	備考
						調整(内)				
1	50 縄文土器 深鉢底部	—	30.0	85.0	—	斜溝文 底部: 縄代庄板 ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙 10YR8/4 浅黄橙	1/2	施文方向横位 原体燃り右RL	
2	SI 1 縄文土器 深鉢底部	—	33.0	80.0	—	条板	10YR8/3 浅黄橙	1/2	水神平式土器の可能性あり	
3	弥生土器 基本刷字6刷	—	40.0	—	—	条板(横走) 条板(横走)のちナデ	25YR6/4 にぶい橙 7.5YR4/1 褐灰	小片	堀山出村式(弥生前期)	
4	弥生土器 漆	(258.0)	45.0	—	—	条板(斜位) 追継刺突文 ナデ	10YR8/4 浅黄橙 10YR8/3 浅黄橙	口縁部1/9	水神平式土器 (弥生中期)	
5	SI 1 弥生土器 床面 漆	164.0	23.0	—	—	口縁: ナデ 脚部: タテハケ ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙 10YR7/4 にぶい黄橙	小片	口縁下端は削目か?	
6	SI 1 弥生土器 床面 漆	146.0	34.0	—	—	(口縁: ナデ 脚部: タテハケ ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙 10YR7/3 にぶい黄橙	1/6	口縁下端は削目か?	
7	SI 3 弥生土器 グリッド② 底11短頭壺	(180.0)	45.0	—	—	口縁: タテハケのちナデ 口縁: ヨコハケのちナデ	25YR7/8 橙 25YR7/8 橙	口縁1/4		
8	SI 3 弥生土器 グリッド②③ 底10短頭壺	166.0	65.0	—	—	タテハケ ナデ	10YR8/4 浅黄橙 10YR8/4 浅黄橙	口縁1/4		
9	SI 3 弥生土器 長頭壺 グリッド④	146.0	60.0	—	—	口縁: 極凹線 3条 脚部: タテハケ 脚部: ヨコナデ	5YR6/6 橙 7.5YR7/6 橙	口縁部1/4	外面に煤付着 焼線2条か?	
10	SI 3 弥生土器 把手付長頭壺 グリッド④	124.0	100.0	—	—	口縁: 極凹線 3条 タテハケのちミガキ 脚部: ミガキ (口縁: ヨコハケ 脚部: ケズリ	10YR7/4 にぶい黄橙	口縁部1/2	把手の大部分は欠損	
11	SI 3 弥生土器 短頭壺 グリッド②	104.0	105.0	—	—	ハケの一部ナデ ハケのちヨコナデ	7.5YR6/4 にぶい橙 7.5YR6/4 にぶい橙	4/5	黒斑あり 燒成裏文様あり	
12	SI 3 弥生土器 壺 グリッド①	—	22.0	—	—	タテハケ 脚部: ナデ 脚部: ヨコハケ	10YR7/4 にぶい黄橙 10YR7/3 にぶい黄橙	脚部1/8 脚部1/2	外面下半に煤付着 分割製作技法	
13	SI 3 弥生土器 有段口縁壺	104.0	120.0	28.0	—	口縁: 極凹線 5条。肩部 脚部: ミガキ 口縁: ミガキ 脚部: ナデ+ヨコガキ	10R4/3 赤褐 10R4/3 赤褐	口縁部1/4 脚部1/2	内外面赤彩、精良土器	
14	SI 3 弥生土器 有段口縁壺 ④	143.0	155.0	40.0	—	ミガキ (口縁: ミガキ 脚部: タテハケ 脚部: ヨコハケ)	25YR5/6 明赤褐 10R6/6 橙	口縁部2/3 脚部1/2	内外面赤彩(残存悪い) 外面脚部黒斑あり	
15	SI 3 弥生土器 壺	164.0	40.0	—	—	ナデ (口縁: ナデ 脚部: ケズリ)	10YR8/4 浅黄橙 10YR7/6 明黄褐	口縁部1/4	磨滅が激しい	
16	SI 3 弥生土器 壺(脚部)	—	110.0	48.0	—	ナデ 脚部: ハケのち繊細なナデ ナデ	7.5YR6/6 橙 7.5YR6/4 にぶい橙	底部1/2 脚部1/6	内面ともに磨滅激しい 影響薄く、調整精緻	
17	SI 3 弥生土器 壺 グリッド②	138.0	199.0	—	—	口縁: ナデ。下端削目 脚部: タテハケのちヨコハケ 口縁: ナデ 脚部: ケズリの上半のみナデ	7.5YR5/3 にぶい橙 7.5YR6/2 灰褐	1/6 1/4	外面に煤付着	
18	SI 3 弥生土器 壺 グリッド③	160.0	240.0	—	—	口縁: ヨコナデ 脚部: タテハケ。肩部に追継刺 突文 (口縁: ヨコナデ 脚部: ヨコハケ)	10YR7/3 にぶい黄橙 10YR7/3 にぶい黄橙	口縁部1/3 脚部1/3		
19	SI 3 弥生土器 壺 グリッド③④	190.0	293.0	36.0	—	口縁: ヨコナデ 脚部: タテハケ。肩部に追継刺 突文 (口縁: ヨコナデ 脚部: ヨコハケ)	10YR7/4 にぶい黄橙 10YR8/3 浅黄橙	1/3		
20	SI 3 弥生土器 壺 グリッド③	179.0	260.0	47.0	—	口縁: ヨコナデ 脚部: タテハケ (口縁: ヨコハケ 脚部: ケズリのちナデ)	10YR6/4 にぶい黄橙 7.5YR6/6 橙	口縁~脚部 1/4 底部完存		
21	SI 3 弥生土器 壺	210.0	170.0	—	—	口縁: ヨコナデ 脚部: ヨコハケのちナデ 脚部: タテハケ。肩部に追継刺 突文 (口縁: ナデ 脚部: ケズリ)	7.5YR7/6 橙 7.5YR7/4 にぶい橙	1/4		

番号	遺構 出土位置	器種	口径 (mm)	残存高 (mm)	底径 (mm)	調整(外)		色調(外) 色調(内)	残存率	備考
						調整(内)				
22	SI 3 グリッド②	弥生土器 底部	—	—	44.0	制部: ケズリ 底部: ナデ	75YR6/6 棕 5YR5/6 明赤褐	底部完存	内面の摩滅激しい	
23	SI 3	弥生土器 底部	—	—	44.0	ヨコハケ	10YR4/1 灰褐 10YR4/1 灰褐	底径1/2		
24	SI 3 グリッド③	弥生土器 甌(底部)	—	40.0	45.0	タテハケ ケズリ	10YR7/3 にぶい黄棕 25Y7/2 灰黄	底部完存	外面に煤付着、削減激しい	
25	SI 3	弥生土器 底部	—	40.0	28.0	—	25YR6/8 棕 25YR6/8 棕	底部完存	摩滅が激しい	
26	SI 3 グリッド④	弥生土器 甌または壺	136.0	105.0	—	口縁: ナデ 制部: タテハケ 口縁: ヨコナデ 制部: ケズリのちハケ	10YR6/6 棕 5YR6/6 棕	2/3	内面赤彩 外面黒斑	
27	SI 3 グリッド⑤	弥生土器 甌	166.0	65.0	—	口縁: 楔凹線 8 条 制部: ハケ 口縁: ナデ 制部: ケズリ	10YR7/2 にぶい黄棕 10YR8/2 灰白	1/2	外面に煤付着	
28	SI 3 グリッド⑥	弥生土器 甌	158.0	198.0	30.0	口縁: 楔凹線 7 条 制部: タテハケ 口縁: ナデ 制部: ケズリ	10YR4/1 灰褐 10YR6/2 灰黄褐	1/4		
29	SI 3	弥生土器 高杯(環部)	300.0	50.0	—	ミガキ ミガキ	10YR7/3 にぶい黄棕 10YR7/4 にぶい棕	口縁部1/2	内面赤彩(内面の赤彩残存 悪い)	
30	SI 3 グリッド⑦	弥生土器 把手付高杯	—	55.0	—	ミガキ ミガキ	10YR7/4 にぶい黄棕 10YR7/3 にぶい黄棕	环部1/2		
31	SI 3 グリッド⑧	弥生土器 高杯(脚部)	—	35.0	—	ミガキ ミガキ	75YR4/3 棕 10YR5/2 灰黄褐	1/2	内面黒斑	
32	SI 3 グリッド⑨	弥生土器 高杯(脚部)	—	46.0	46.0	脚部径 ミガキ ナデ	75YR7/6 棕 10YR4/1 灰褐	脚部上半完 存		
33	SI 3 グリッド⑩	弥生土器 高杯(脚部)	—	50.0	43.0	脚部径 ミガキ ナデ	75YR5/3 にぶい褐 75YR5/2 灰褐	脚部1/2		
34	SI 3	弥生土器 高杯(脚部)	—	85.0	—	脚部径 ミガキ 49.0 ケズリ	75YR7/4 にぶい黄棕 10YR8/4 浅黄棕	脚部完存		
35	SI 3	弥生土器 高杯(脚部)	—	123.0	51.0	脚部径 ミガキ ケズリ	75YR6/6 棕 10YR6/3 にぶい黄棕	脚部完存	外面赤彩	
36	SI 3	弥生土器 高杯	—	110.0	158.0	ミガキ 環部: ミガキ 脚部: ヨコナデ	10YR6/2 灰黄褐 10YR8/4 浅黄棕	脚部完存	内面黒斑あり	
37	SI 3 試掘	弥生土器 高杯(脚部)	—	105.0	51.0	脚部径 ミガキ ナデ、ヨコハケ	25YR5/6 明赤褐 75YR7/4 にぶい棕	脚部完存	外面赤彩	
38	SI 3	弥生土器 高杯	—	115.0	38.0	脚部径 ミガキ 環部: ミガキ	5YR6/6 棕 75YR3/1 黑褐	环部1/2 脚部完存	环部内面黒斑	
39	SI 3	弥生土器 高杯	338.0	198.0	216.0	環~脚部: ミガキ 脚部: ヨコナデ 環部: ミガキ 脚部: ヨコナデ	10YR8/3 浅黄棕 25Y7/18 灰白	环部1/2 脚部2/3	环部内面赤彩の可能性あり 透孔A穴	
40	SI 3 グリッド⑪	弥生土器 高杯	330.0	230.0	190.0	ミガキ 環部: ミガキ 脚部: ナデ	10YR7/4 にぶい黄棕 10YR7/6 明黄褐	口縁部4/5 脚部2/3	外面赤彩の可能性あり 透孔A穴	
41	SI 3 グリッド⑫	土加器 器台(台部)	—	55.0	186.0	脚部径 ミガキ ヨコハケのち粗部のみヨコナデ	10YR5/3 にぶい黄褐 10YR5/2 灰黄褐	脚部1/4	透孔A穴	
42	SI 3 グリッド⑬	弥生土器 高杯(台部)	—	55.0	210.0	ミガキ ヨコハケ、粗部ヨコナデ	25YR5/6 明赤褐 75YR7/4 にぶい棕	1/3	外面赤彩	
43	SI 3 グリッド⑭	弥生土器 高杯	268.0	170.0	205.0	ミガキ ナデ	25YR7/4 深赤褐 25YR7/4 深赤褐	脚部1/2 脚部1/4	外面上赤彩の可能性あり 摩滅が激しい	
44	SI 3	弥生土器 高杯	250.0	200.0	150.0	ミガキ 環部: ミガキ 脚部: ケズリ	75YR7/4 にぶい棕 5YR7/3 にぶい棕	环部1/2 脚部完存	内面上赤彩の可能性あり 摩滅激しく不明瞭	
45	SI 3	弥生土器 高杯	276.0	175.0	166.0	ミガキ 環部: ミガキ 脚部: ナデ	10YR8/3 浅黄棕 10YR7/3 にぶい黄棕	小片 脚部以下 1/2	内面赤彩 透孔A穴	
46	SI 3	弥生土器 高杯(脚部)	—	85.0	162.0	ミガキ ナデ	10YR7/4 にぶい黄棕 25Y8/4 浅黄棕	脚部2/3 脚部1/2	外面赤彩 透孔A穴	
47	SI 3	弥生土器 有段口縁鉢	185.0	60.0	—	ミガキ ミガキ	25YR6/8 棕 25YR6/8 棕	1/4	内面赤彩、精製土器	

番号	遺構 出土位置	器種	口径 (mm)	残存高 (mm)	底径 (mm)	調整(外)		色調(外) 色調(内)	残存率	備考
						調整(内)				
48	弥生土器 有段口縁鉢		196.0	91.0	24.0	口縁:ミガキのち凹線6条 脚部:ミガキ	75YR7/4にぶい橙 ミガキ	口縁部1/4 脚部1/3		
						ミガキ	75YR7/4にぶい橙			
49	弥生土器 グリッド(3)		198.0	70.0	—	ミガキ	5YR4/8 赤褐	1/4	内外面赤彩	
						ミガキ	25YR5/8 明赤褐			
50	弥生土器 鉢		148.0	50.0	—	口縁:ヨコナダ 脚部:タテハケ	10YR6/4にぶい黄橙	口縁部1/4 脚部1/4		口縁に沈継1条
						口縁:ヨコナダ 脚部:ケズリ	75YR6/4にぶい橙			
51	SI 3 グリッド(3)(4)	弥生土器 鉢	152.0	100.0	—	口縁:ヨコナダ 脚部:タテハケ一部ヨコハケ ナダ	25YR6/6 橙	口縁部1/4 脚部4/5	内外面未彩 内外面に媒付着	
						口縁:ヨコナダ 脚部:上半ナダ。下半ヨコハケ	25YR6/6 橙			
52	SI 3	弥生土器 有合鉢(脚部)	—	70.0	192.0	ミガキ ヨコハケ	5YR5/6 明赤褐 75YR4/1 黒褐	1/3	外面赤彩、黒斑	
53	SI 3	弥生土器 有孔亞	105.0	124.0	18.0	ミガキ 口縁:ヨコハケ 脚部:ケズリ	5YR5/6 明赤褐 75YR6/4にぶい橙	1/2	外面赤彩、外面底部黒斑	
54	SI 3	土師器 塊形鉢	78.0	65.5	43.0	タテハケ 口縁:ヨコナダ 脚部下半:ユビナダ	10YR3/1 黒褐 10YR3/1 黑褐	2/3		
55	SI 3	弥生土器 有脚鉢	(232.0)	210.0	—	ミガキ 脚部:ミガキ 脚部:ナダ	75YR7/6 橙 10YR7/4にぶい黄橙	脚部完存 脚部1/4	外面に媒付着	
56	SI 3	弥生土器 器台	252.0	208.0	181.0	ミガキ 脚部:ミガキ 脚部:ヨコハケ	75YR7/6 橙 75YR6/6 橙	脚部3/4 脚部完存	透孔4穴	
57	SI 3	弥生土器 器台(脚部)	—	105.0	52.0	脚部形 ミガキ 脚部工具によるナダ	10YR7/4にぶい黄橙 10YR6/4にぶい黄橙	脚部完存	外面赤彩 透孔3穴	
58	SI 3 グリッド(4)	弥生土器 器台	250.0	150.0	—	口縁:横凹線12条 脚部:ハケのちミガキ	75YR6/4にぶい橙	口縁=脚部 完存	口縁の内外面に少量の媒付着 内外面ともに摩滅らしい	
						口縁:ミガキ 脚部:ハケ	25YR7/6 橙			
59	基本刷字6	弥生土器 底部	—	26.0	44.0	タテハケ ハケ	10YR7/4にぶい黄橙 10YR7/3にぶい黄橙	底部完存		
60	基本刷字6	弥生土器 底部	—	30.0	46.0	タテハケ ハケ	10YR7/3にぶい黄橙 10YR7/2にぶい黄橙	底部完存		
61	基本刷字6	弥生土器 甕(底部)	—	60.0	45.0	タテハケ ケズリのちヨコハケ	10YR6/3にぶい黄橙 75YR7/4にぶい橙	底部完存		
62	基本刷字6	弥生土器 把手	—	最大長 64.0	25.0	ナダ ナダ	75YR7/4にぶい橙 75YR7/4にぶい橙	完存		
63	基本刷字6	弥生土器 有脚鉢(脚部)	—	40.0	72.0	脚部形 ミガキ 精織なナダ	10YR8/4 浅黄橙 10YR7/4にぶい黄橙	脚部1/3		
64	SB 1 8	土師器 小型壺	124.0	25.0	—	ヨコハケのちナダ ヨコハケのちナダ	7.5TR4/2 灰褐 7.5TR5/2 灰褐	小片	外面に媒付着 口縁内面に灰化物付着	
65	SB 1 9	須恵器 甕(有台)	—	17.0	90.0	回転ナダ 回転ナダ 底部:粗いナダ	25Y6/1 黄灰 25Y6/1 黄灰	1/6		
66	SB 2 7	須恵器 环蓋	142.0	14.0	—	回転ナダ 回転ナダ	25Y6/1 黄灰 25Y6/1 黄灰	小片	折りかえし高4mm	
67	SB 4 9	須恵器 环	142.0	10.0	—	回転ナダ 回転ナダ	10YR6/1 黄灰 10YR6/1 黄灰	小片	折りかえし高5mm	
68	SB 4 9	須恵器 环	172.0	12.0	—	回転ナダ 回転ナダ	10YR6/1 黄灰 10YR5/1 黄灰	小片	折りかえし高5mm	
69	SB 2 7	須恵器 甕	—	27.0	88.0	脚部:ヨコハケ 底部:ナダ 脚部:ケズリ 底部:ナダ	10YR7/3にぶい黄橙 75YR8/6 浅黄橙	1/3		
70	SB 4 9	須恵器 环	—	27.0	128.0	回転ナダ 回転ナダ	N6/ 灰 N6/ 灰	1/6		
71	SB 2 6	土師器 甕	—	31.0	70.0	回転ナダ 回転ナダ	25Y7/1 灰白 25Y7/1 灰白	小片		
72	SB 4 9	須恵器 甕(有台)	(250.0)	30.0	—	回転ナダ 回転ナダ	N7/ 灰白 N7/ 灰白	自然釉		
73	SB 4 9	須恵器 甕	—	16.0	—	回転ナダ 回転ナダ	10YR6/1 黄灰 10YR6/1 黄灰	つまみ1/2	つまみ径24mm	

番号	遺構 出土位置	器種	口径 (mm)	残存高 (mm)	底径 (mm)	調整(外)		色調(外) 色調(内)	残存率	備考
						調整(内)				
76	須恵器 环壺		(148.0)	17.0	—	回転ナデ	7.5Y7/1灰白	小片	折りかえし高3mm	
77	須恵器 壺(底部)	—	—	50.0	(110.0)	回転ナデ	7.5Y7/1灰白	—	1/6	
78	須恵器 壺	須部径 138.0	45.0	—	—	回転ナデ	N8°灰白	—	1/4	外面と内面一部に自然釉
79	SB 4 6	須恵器 瓶(口縁部)	110.0	21.0	—	回転ナデ	7.5Y5/1灰	—	1/5	内外面自然釉
80	SB 4 8	須恵器 环(無台)	128.0	32.0	81.0	回転ナデ 底部:ナデ	25Y8/2灰白	小片	重ね焼きの痕 破成不良	
81	SB 4 9	須恵器 环(無台)	142.0	34.0	100.0	回転ナデ 底部:粗いナデ	10YR5/1褐灰	—	1/3	
82	SB 4 8	土師器 長胴壺	180.0	70.0	—	カキメ タテハケのちヨコハケ、ナデ	7.5YR7/6橙	—	1/4	外面に煤付着
83	62	須恵器 环(有台)	—	15.0	84.0	回転ナデ	5Y6/1灰	底部1/4		
84	62	須恵器 环(無台)	—	22.0	94.0	回転ナデ	5Y6/1灰	—	1/4	
85	62	須恵器 环(無台)	—	15.0	100.0	回転ナデ	5Y6/1灰	小片		
86	51	須恵器 壺(口縁部)	(262.0)	28.0	—	回転ナデ	N5°灰	小片		
87	159	須恵器 壺	須部径 116.0	54.0	—	カキメ 回転ナデ	7.5Y6/1灰	—	1/7	外面肩部と内面颈部に自然釉
88	88	土師器 壺(底部)	—	25.0	74.0	側部:ケズリ 底部:ナデ	7.5YR8/4浅黄橙 ナデ	—	1/3	
89	88	須恵器 环(有台)	—	20.0	125.0	ナデ	N 5°灰	—	1/6	底部にヘラ記号
90	SI 1上 基本刷字5	土師器 長胴壺	230.0	60	—	口縁:ナデ 脇部:カキメ	10YR8/3浅黄橙	口縁部L/3 肩部以下		外面面質激しい
91	SI 1上 基本刷字5	土師器 壺(底部)	—	48.0	76.0	口縁:ナデ 脇部:カキメ	10YR8/3浅黄橙	1/6		
92	SI 1上 基本刷字5	土師器 壺(底部)	—	57.0	75.0	ケズリのち回転ヨコハケ 底部:回転ナデ	7.5YR8/3浅黄橙	底部完存		底削成が激しい
93	SI 1上 基本刷字5	土師器 壺(底部)	—	47.0	72.0	ケズリのち回転ヨコハケ 底部:ナデ ヨコハケ、一部ナデ	7.5YR7/3にぶい橙 7.5YR7/4にぶい橙	—	1/5	
94	SI 1上 基本刷字5	須恵器 环壺	124.0	12.0	—	回転ナデ 天井部:ナデ	10YR6/1褐灰	—	1/3	折りかえし高2mm
95	SI 1上 基本刷字5	須恵器 环壺	128.0	20.0	—	回転ナデ	5Y6/1灰	—	1/3	
96	SI 1上 基本刷字6	須恵器 环壺	124.0	22.0	—	回転ナデ	7.5Y7/1灰白	—	1/4	折りかえし高3mm つまみ高7mm
97	SI 1上 基本刷字6	須恵器 环壺	—	15.0	—	回転ナデ	25Y6/1灰灰	—	1/4	つまみ径32mm
98	SI 1上 基本刷字6	須恵器 环(無台)	123.0	26.5	85.0	回転ナデ 底部:粗いナデ	7.5Y6/1灰	—	1/2	
99	SI 1上 基本刷字5	須恵器 环(無台)	132.0	34.0	80.0	回転ナデ 底部:ナデ	N6°灰	—	1/4	外面に重ね焼き痕
100	SI 1上 基本刷字5	須恵器 环(無台)	128.0	32.0	98.0	回転ナデ	10YR7/1灰白	—	1/3	外面に重ね焼き痕
101	SI 1上 基本刷字5	須恵器 环(有台)	106.0	41.0	76.0	回転ナデ 底部:ナデ	N6°灰	—	1/2	
102	SI 1上 基本刷字6	須恵器 瓶(肩部)	158.0	38.0	—	回転ナデ	7.5Y4/3刷オリーブ	—	1/4	肩部上端に沈綴2本 外面に自然釉
103	SI 1上 基本刷字6	須恵器 瓶(肩部)	170.0	28.0	—	回転ナデ	7.5Y5/3浅黄橙	—	1/2	外面に自然釉
104	SI 1上 基本刷字6	土師器 瓶(口縁)	260.0	46.0	—	ナデ 突変へ下:カキメ ナデ	7.5YR8/4浅黄橙 7.5YR8/3浅黄橙	口縁部L/9		外面に煤付着
105	SI 1上 基本刷字6	土師器 瓶(把手)	—	55.0	—	ナデ ヨコナデ	25Y8/1灰白 25Y7/1灰白	小片		燒成不良

番号	遺構 出土位置	器種	口径 (mm)	残存高 (mm)	底径 (mm)	調整(外)		色調(外) 色調(内)	残存率	備考
						調整(内)				
106	土師器 瓶		—	180.0	148.0	タタキのちカキメ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/2 白灰	1/6	内面に煤付着、把手被熱
108	須恵 甕			41.0	260.0	タタキ(平行線文) カキメ	5PB3/1 青灰	5PB5/1 青灰	小片	内面に一部隕灰 外面上自然釉、韓式系土器
109	須恵質 甕			38.0		タタキ(平行線文) カキメ	5PB5/1 青灰	5PB7/1 明灰	小片	内面に一部隕灰 外面上自然釉、韓式系土器
110	土師質 甕			75.0		タタキ(格子文)	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR8/3 にぶい褐	小片	韓式系土器
111	土師質 甕			48.0		タタキ(格子文)?	10YR8/2 黄褐	10YR8/1 褐灰	小片	内外面とも一部炭化物付着、韓式系土器
112	土師質 甕?			32.0		タタキ(格子文)?	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	小片	韓式系土器
113	土師質 甕?			47.0	160.0	タタキ(格子文)	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/4 にぶい橙	小片	韓式系土器
114	1 土師器 皿		86.0	14.0	—	ナデ	5YR6/6 橙	7.5YR8/6 浅黄橙	1/6	
115	1 土師器 皿		88.0	13.0	—	ナデ	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	小片	
116	1 土師器 皿		92.0	15.0	—	ナデ	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	小片	
117	1 皿		108.0	20.0	—	ナデ	7.5YR8/6 浅黄橙	7.5YR7/8 橙	小片	
118	1 土師器 皿		110.0	22.0	—	ナデ	7.5YR7/6 橙	7.5YR8/6 浅黄橙	小片	
119	1 土師器 皿			16.0	98.0	ナデ	5YR7/6 橙	5YR7/8 橙	小片	
120	3 土師器 皿		60.0	12.5	40.0	ヨコナデ・ナデ	5YR6/6 橙	5YR7/8 橙	1/3	
121	3 土師器 皿	(69.0)	15.0	—		ナデ	25YR7/8 橙	25YR7/8 橙	1/3	
122	3 土師器 皿		69.0	1.3	40.0	ナデ	25YR6/8 橙	25YR6/8 橙	1/3	
123	3 土師器 皿		80.0	15.0	60.0	ナデ	7.5YR8/6 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	1/4	
124	3 土師器 皿		80.0	15.0	30.0	ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR7/6 橙	1/4	口縁部に付着する 橙紅色顔料
125	3 土師器 皿		82.0	15.0	30.0	ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	1/4	
126	3 土師器 皿		81.0	20.0	—	ナデ	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	小片	
127	3 土師器 皿		97.0	14.0	60.0	ナデ	10YR4/1 褐灰	25YR6/8 橙	小片	
128	3 土師器 皿		112.0	28.0	60.0	ナデ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	1/2	
129	3 土師器 皿		120.0	22.0	—	ナデ	7.5YR8/6 浅黄橙	5YR7/8 橙	小片	
130	3 土師器 皿		122.0	22.0	60.0	ナデ	7.5YR8/6 浅黄橙	5YR7/6 橙	1/6	
131	3 土師器 皿		140.0	25.0	—	ナデ	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	1/6	
132	3 肉器 壺? (底部)		—	10.0	36.0	ナデ	25Y7/2 黄	10YR7/2 にぶい黄橙	底部完存	
133	3 青磁 碗 (底部)		—	20.0	50.0	施釉	7.5 Y 7.2 灰白	7.5Y7/2 白灰	1/2	見込みに墨書きによる文様
134	3 古董戸 窯? 壺?		124.0	55.0	—	回転ナデ	5Y6/3 オリーブ黄	5Y6/3 オリーブ黄	1/6	貢入
135	8 土師器 皿		82.0	17.0	34.0	ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR8/6 浅黄橙	1/4	
136	8 土師器 皿		85.0	15.5	—	ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	1/6	
137	8 土師器 皿		90.0	18.5	57.0	ナデ	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	小片	

番号	遺構 出土位置	器種	口径 (mm)	残存高 (mm)	底径 (mm)	調整(外) 調整(内)		色調(外) 色調(内)	残存率	備考
						ナデ	ナデ			
138	42 土師器 皿		76.0	9.5	48.0	ナデ	ナデ	7.5YR8-4 浅黄橙 7.5YR8-4 浅黄橙	小片	
139	139 盆 1 土師器 皿		80.0	16.0	40.0	ナデ	ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙 10YR8/4 浅黄橙	1/4	海綿骨針含む(多め)
140	140 盆 1 土師器 皿		138.0	25.0	70.0	ナデ	ナデ	7.5YR8-4 浅黄橙 7.5YR8-4 浅黄橙	1/6	海綿骨針含む
141	141 173 土師器 皿		94.0	13.0	—	ナデ	ナデ	7.5YR8-4 浅黄橙 7.5YR8-4 浅黄橙	小片	
142	142 173 土師器 皿		94.0	19.0	—	ナデ	ナデ	10YR8/4 浅黄橙 10YR8/4 浅黄橙	1/7	
143	143 184 土師器 皿		88.0	13.0	77.0	ナデ	ナデ	7.5YR8-4 浅黄橙 7.5YR8-4 浅黄橙	小片	
144	144 184 土師器 皿		86.0	11.5	—	ナデ	ナデ	7.5YR8-4 浅黄橙 7.5YR8-4 浅黄橙	1/5	
145	145 184 土師器 皿		126.0	23.0	80.0	ナデ	ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙 7.5YR7/4 にぶい橙	1/7	
146	146 184 土師器 皿		140.0	25.5	80.0	指圧後ナデ	ナデ	7.5YR8-4 浅黄橙 7.5YR8-4 浅黄橙	1/3	
147	147 183 青磁 杯? (底部)		—	10.0	44.0	施釉	施釉 高台部:割りだし	N7/灰	1/2	貫入
148	148 珠洲焼 鉢		—	26.0	82.0	おろし目	ナデ 成形部:工具压痕	N6/灰	小片	内部自然釉
149	149 6 土師器 皿	(108.0)	20.0	—	—	ナデ	ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙 10YR7/4 にぶい黄橙	小片	
150	150 6 土師器 皿	(130.0)	30.0	—	—	ナデ	ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙 7.5YR7/3 にぶい橙	小片	
153	153 63 土師器 皿	106.0	17.0	80.0	—	ナデ	ナデ	7.5YR7/6 橙 7.5YR7/6 橙	1/6	
154	154 63 土師器 壺 (底部)	—	20.0	89.0	—	ヨコハケ	ナデ	5YR7/6 橙 10YR8/3 浅黄橙	小片	
155	155 63 頭器 壺蓋	(142.0)	11.0	—	—	回転ナデ	回転ナデ	25Y6/1 黄灰 5Y7/1 灰白	小片	折りかえし高3mm
156	156 63 頭器 壺 (無台)	—	—	(106.0)	—	回転ナデ	回転ナデ:底部:粗いナデ	7.5Y6/1 灰 5Y6/1 灰	1/4	
157	157 63 頭器 壺 (有台)	142.0	45.0	95.0	—	回転ナデ	回転ナデ	10YR8/3 浅黄橙 25Y7/2 黄灰	1/6	
158	158 63 頭器 壺 (底部)	—	30.0	68.0	—	回転ナデ 底部:ナデ	回転ナデ	10YR7/1 灰白 10YR7/2 にぶい黄橙	1/3	外面に自然釉 器壁は空気により膨張
159	159 63 加賀燒 甕	—	65.0	—	—	回転ナデ	回転ナデ	25Y5/1 黄灰 7.5YR5/2 灰褐	小片	押印
160	160 63 珠洲燒 鉢	(238.0)	55.0	—	—	回転ナデ	回転ナデ	7.5Y6/1 灰 7.5Y5/1 灰	小片	
161	161 50 土師器 皿	94.0	14.0	66.0	—	ナデ	ナデ	7.5YR8-4 浅黄橙 7.5YR8-4 浅黄橙	1/6	
162	162 50 土師器 皿	104.0	12.5	64.0	—	ナデ	ナデ	7.5YR8-6 浅黄橙 7.5YR8-6 浅黄橙	小片	
163	163 50 土師器 皿	120.0	22.0	—	—	ナデ	ナデ	10YR8/3 浅黄橙 10YR8/3 浅黄橙	小片	
164	164 50 土師器 皿	160.0	29.0	108.0	—	ナデのち口縁ヨコナデ	ナデのち口縁ヨコナデ	10YR8/3 浅黄橙 10YR8/3 浅黄橙	小片	
番号	遺構 出土点地	器種	最大長 (mm)		最大幅 (mm)		最大厚 (mm)		重量 (g)	
									材質	
64	SI 3	磨石	66.5	—	41.5	—	36	55.8	安山岩	塊付着
65	SI 3	敲石	87	—	72	—	36	135.4	軽石凝灰岩	塊付着
151	8 石笛	敲石	157	—	106.5	—	63	1409	凝灰岩	完存
152	8 石笛	凹石	109	—	118	—	64	1065	安山岩	
165	50	磨石類	110	—	88	—	13	1912	安山岩	
107	SI 1	釘	55	—	10	—	8	72	金属	後世の混入品か



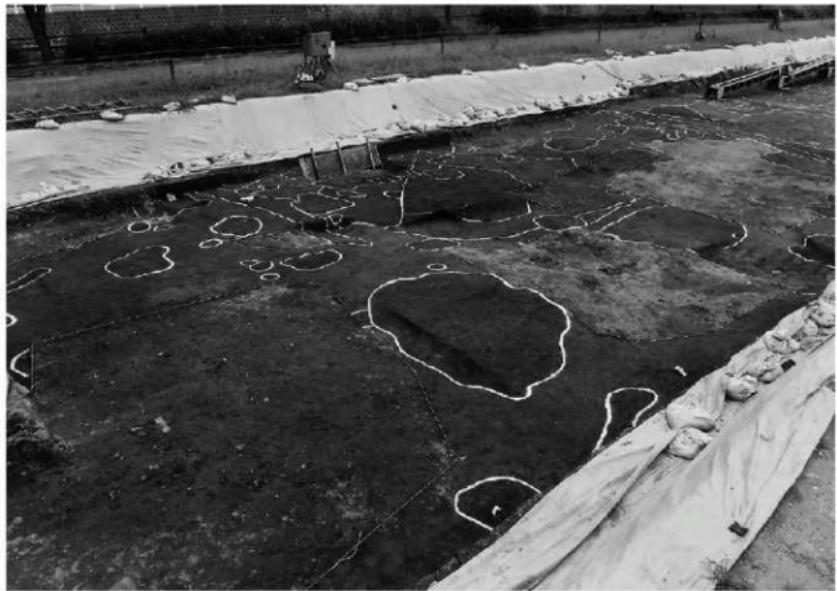
調査区北側航空写真(南東から)



調査区全景写真(北から)



調査区全景写真（南から）



S11・S13検出状況（北西から）



SI3遺物出土状況（貼床あり）（北東から）



SI3完掘状況（貼床なし）（北東から）



SI3グリッド②遺物出土状況（北西から）



SI3グリッド④遺物出土状況（南東から）



SI3グリッド③遺物出土状況（南東から）



SI3溝・貼床検出状況



SI1・SI3完掘後状況（南西から）



SBI完掘全景(北から)



SB2完掘全景(南から)



SB3完掘全景(南東から)



SB4完掘全景(南東から)



SD78土層断面(南から)



SD78全景(北東から)



SD62・SD63調査区西縁土層断面(東から)



SD62・SD63東縁土層断面(SP71に立ち北東から)



SD82調査区西壁土層断面(東から)



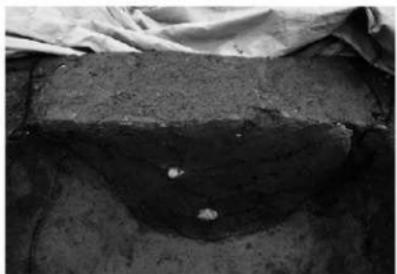
SD88西縁土層断面(東から)



SD81土層断面(北から)



SD112土層断面(南から)



SD50北側土層断面 (南から)



SD50南側土層断面 (南から)



SD173・SD174遺構検出状況



SD3土層断面 (東から)



SD3・SD8埋土内巨礫混入状況 (西から)



SD2土層断面 (東から)



SD1埋土内巨礫混入状況 (東から)



SD1西壁土層断面 (東から)







36



38

39



40



41



42

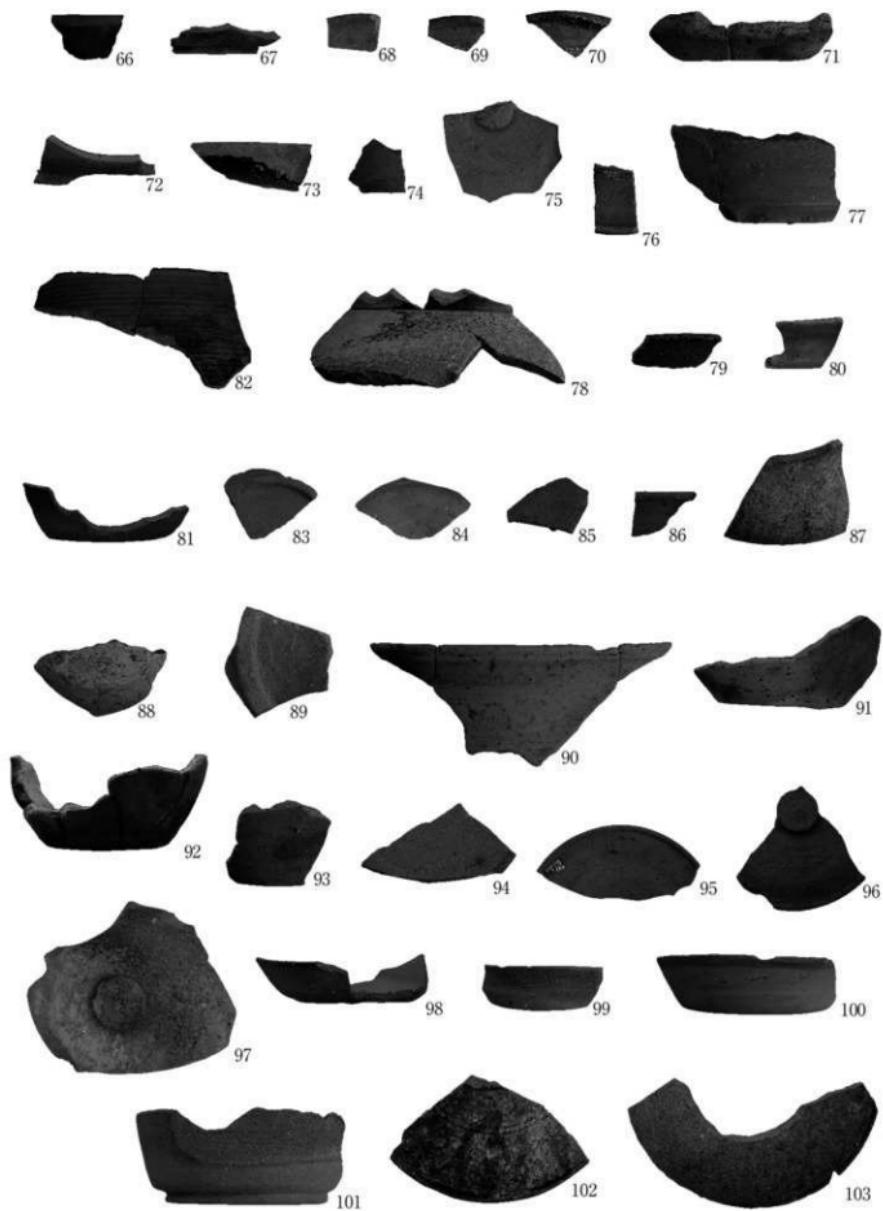


43



44







104



108

0 S ≈ 1/1 5cm

107



109



111



110



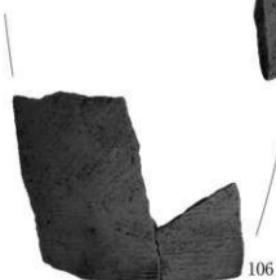
112

113

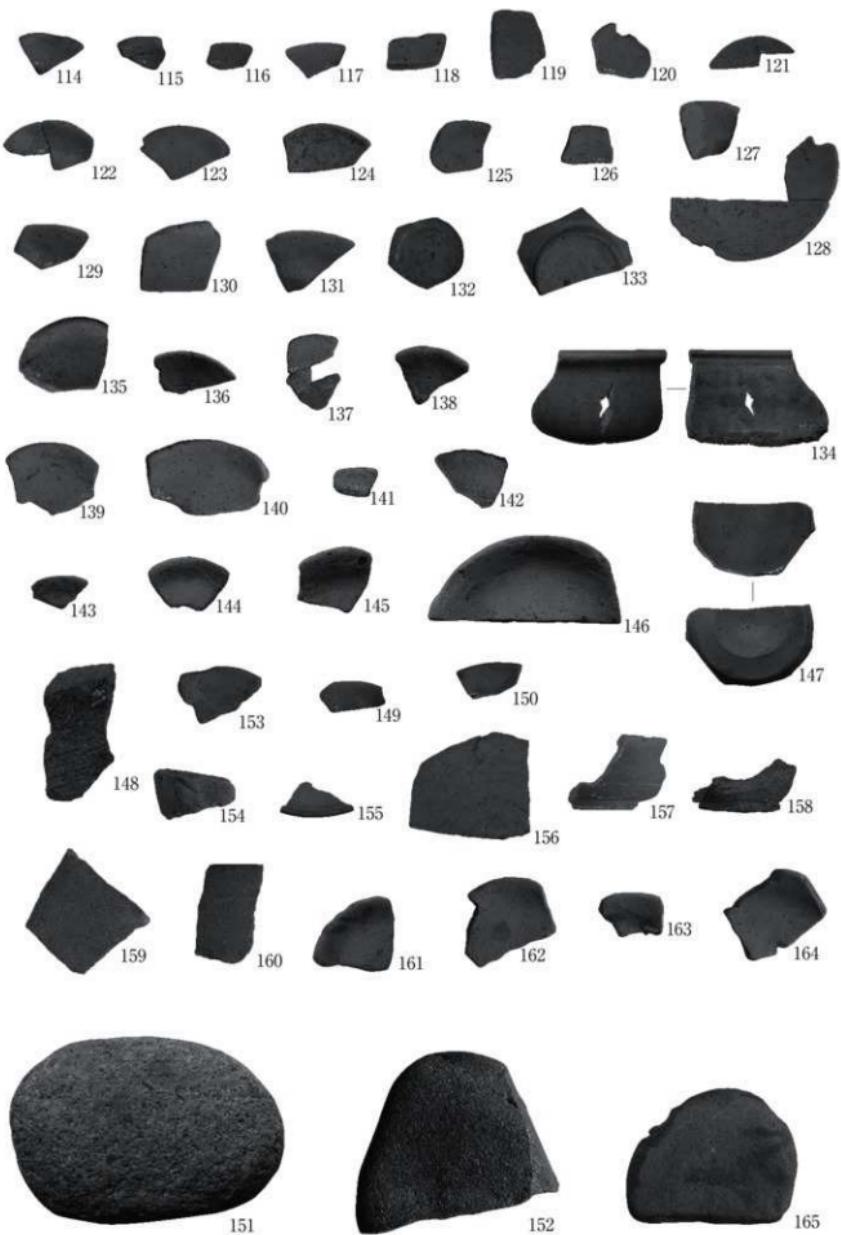
0 S ≈ 1/2 10cm



105



106



報 告 書 抄 錄

ふりがな	おうぎがおかごしょいせき							
書名	扇が丘ゴショ遺跡							
副署名	全沢工業大学 47 号館建設に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
編著者名	西村 慶子							
編集機関	野々市市教育委員会							
所在地	〒921-8510 石川県野々市市三納一丁目 1 番地 Tel : 076-227-6122							
発行機関	野々市市教育委員会							
発行年月日	西暦 2019 年 3 月 15 日							
所収遺跡名 フリガナ 扇が丘 ゴショ遺跡	所在地 市町村 石川県野々市市 扇が丘	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因 記録 保存 調査
		市町村	遺跡番号					
		172120	1203200	36° 31' 44"	136° 35' 45"	2017年8月 1日 ~ 2017年9月27日	1,016	
種 別	主な時代		主な遺構			主な遺物	特記事項	
	集落	弥生・古代・中世	堅穴建物 2、掘立柱建物 4、溝、土坑など	弥生土器、土師器 須恵器、石器				
要 約	弥生時代の堅穴建物、古代の掘立柱建物、中世の溝跡を確認した。弥生時代については当遺跡の北側に広がる「高橋セボネ遺跡」が弥生後期後半の集落遺跡であり、焼失住居など類似点も多いことから同じ集落域と考える。古代・中世については過去の当遺跡調査で記録されていた建物やその他遺構と類似しており、古代は8世紀後半から9世紀頃、中世は14世紀頃を中心とした集落遺跡であると考えられる。今後は扇が丘ゴショ遺跡と高橋セボネ遺跡を一連の遺跡として考えていく必要性がある。							

2019 年 3 月 15 日 発行

全沢工業大学 47 号館建設に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

扇が丘ゴショ遺跡

著作権所有 石川県野々市市三納一丁目 1 番地

発 行 者 野々市市教育委員会

印 刷 者 石川県野々市市矢作三丁目 18
高桑美術印刷株式会社